
不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

トロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

【Nコード】

N6548Y

【作者名】

トコ

【あらすじ】

自他共に認めるヤンキーの早森いなほは、ある日死の運命にあった少年の運命を変えたことに目をつけられ、謎の男に異世界に吹き飛ばされた。

元の世界にはいなかった人の天敵である魔獣、そして魔力を用いて使われる魔法の存在。ファンタジーと呼ばれる世界にて、いなほにあるのは己の五体が唯一つ。

唸る筋肉！暴れる筋肉！異世界ファンタジーなんのその。男ひたすら拳を固め、貫き通すは我が信念。無茶と無謀を笑われようが、鋼

の肉体漲らせ、筋肉馬鹿が我が道のみ行く。
端的にまとめると、荒唐無稽マッスルファンタジーです。よければ
一読のほうをよろしくお願いします。

第一話「祈る少女とぶっ飛びヤンキー」(軽傷)【(前書き)

筋肉って凄い。全編通してそんな話ですのでご注意ください。

第一話「祈る少女とぶっ飛びヤンキー（軽傷）」

別に現実を理解していないわけではない。

ただ単純に、藁にすらすがらなければならぬほど、現実が冷たいのだ。

「願いを捧げる。私の夢、私の理想、あなたを象る全てが、私の願いという血肉で成る」

少女は大地に膝をつき呪文を歌っていた。彼女の膝もとには、土の大地に描かれた下手くそな魔法陣が一つ。北に太陽を書き、西に盾を示し、東に剣を描く、そして南に少女が一人。中央には東西南北を繋ぐ星の印。

それは、ありもしない魔法陣と呪文だ。だが少女がそんな新しい魔法陣と呪文を生み出したのかと言えば、そうではない。少女は簡単な魔法こそ使えるが、せいぜいはちよつとした炎をともしたりといった程度、召喚を行えるほど、ましては新たな魔法を使えるほどの卓越した魔導師ではない。

「理想を紡ぎ、理想と化せ。あまねく悪をかき消す光、祖は太陽、其は無限の勇気を抱く奇跡」

だが詠唱は続く。両手を組んで胸の前、祈りを捧げる少女がまとう衣服はただでさえぼろぼろの上、土で汚れて身窄らしい。体にはいくつもの擦り傷、そして足首は痛めたのだらう、青く腫れているが、それらの傷の痛みを押し殺し、少女は意味のない詠唱をひたすら綴る。

少女は逃げてきた。平和な日常の中、ある日突然村を襲撃してき

た巨大な魔獣、トロールの群れに追い立てられ、少女は家族、友人、全てに守られ逃げおおせた。魔獣の群れにより鮮血に溢れることになった村から逃げ、森に入り込み、ただ闇雲に走った。そしてつい先ほど、森まで追い立ててきたトロールにより、少女は友人と家族と引き裂かれ、一人孤独に逃げ続け、ついに足首を痛め大地に屈したのだ。

自分は無力だ。か細い腕に足、魔法を使えるほどの魔力もないただの少女。そんな自分に何ができるわけでもない。でも助けたかった。助けてほしかった。この理不尽を救う奇跡が欲しかった。

「其の総称は人の夢。其の理想は世界の夢。大いなるあなたよ、大いなる奇跡よ、この身、この言霊に応えたまえ」

詠唱は続く。だがその詠唱は、今少女の横に置かれた誰とも知らぬ人が書いた『絵本』に記されたものだ。そう、それはただの御伽話の言葉に過ぎず、どんなに願おうが祈ろうが、その全てに意味はない。

だが少女は歌う。歌うように祈る。藁にもすがろう。藁にしかすがれないから、藁にだってすがってみせよう。

絵本の名前は『太陽の勇者』。悪の魔王を打倒する偉大な勇者の物語。そして、少女が歌う詠唱と、下に描いた魔法陣こそ、絵本に出てくる勇者召喚の召喚魔法。

不可能である。出所不明の絵本の在りえない詠唱に意味はない。詠唱は続く。でも少女にはこれしかなかった。小さなころから、手垢で汚れても読み続けたこの理想の英雄に願うしか、少女には残されてなかった。

だから祈る。お願いと、どうか奇跡よ起こってくださいと。

「誓約は今。応えよ、応えよ、奇跡を具体せよ。この世界に光をもたらせ」

お願いします。それだけが、弱い少女にできる唯一の抵抗だから。

「太陽の勇者よ！」

来て！ 両手に力を込める。だが、どんなに待っても、少女の描いた魔法陣には何かが起きるわけでもなく、響くのは森の木々のざわめきばかり。

「そんな……」

わかってはいたけれど、それでも奇跡のない現実には少女は今度こそ力を失った。組んだ両手は力なく大地につき、絶望感が少女の肩に重くのしかかる。

現実の理不尽を打倒する奇跡の存在はない。世界はいつも冷たくて、少女の穏やかな日常を守ってくれる英雄はいない。

「どうしよう……お母さん、お父さん、エイミー、トト……」

溢れる涙は、彼らへの罪悪からだ。何もできなくてごめんなさい。弱くってごめんなさい。

私には何もできない。圧倒的な力を前に、私はただただ逃げるだけしかできないんだ。

少女の中の芯が砕ける。犠牲にして逃げるだけの己への自責の念に潰されそうになる中、不意に木々のざわめきではない、木々をへし折る音が聞こえてきた。

それは膝をつく少女にどんどん近付いてくる。そして、最早動くこともできない少女の前に、音の主は現れた。

「あ……」

悲鳴すらあげられない。少女の前に現れたのは、少女の倍以上はあるつかという巨体の、緑色の皮膚をもつ異形の怪物。トロールと呼ばれる魔物は、恐怖に震える少女を見下ろして、手に持つ棍棒を見せびらかすように掌で弄ぶ。

トロールを見て、少女の記憶が掘り起こされる。突如群れをなして村を襲撃してきたトロールの群れ、駐在していた兵士は闘うでもなくなさけない悲鳴をあげて一目散に逃げ、村の人々が次々と死んでいく地獄が具現した世界。それでも母親や友が自分をここまで逃がしてくれたこと。

「嫌だ……」

立ち上がれもせず、後ずさる。足首の痛みのせいか、最早起き上がることさえ難しいのが見て取れた。森のなかで転び、運悪く木に打ちつけてしまったときの怪我だ。これがなければ、少女はひたすらに逃げていただろう。

だがもう逃げられない。運悪くトロールに見つかった今、少女を守る優しい母に、頼もしい友人達がいない以上、少女の命運はすでに決まっていた。

「グビヤビヤビヤビヤ」

汚らしい鳴き声をあげながら、トロールがジリジリと少女に近づく。あくまでゆっくりと、絶望に沈む少女を見て楽しむように。

だがそんなトロールの下衆な思考など理解する余裕のない少女は、必死に後ろに下がるしかできない。大地に刻んだ魔法陣が後ずさる度に少女の体で消されていく。まるで願った奇跡はただの張り子であると言わんかのように、呆気なく消える少女の理想。

一歩踏み込んだトロールが、少女の絵本を踏みつぶした。踏みに

じられ、蹂躪される少女の夢、理想。ありもしない奇跡に意味はない。世界はどこまでも理不尽で、この世に奇跡をもたらす勇者はいない。

「嫌だ……」

「ゲヒヤヒヤヒヤ」

「嫌だ……！」

次々に零れる涙。否定しても迫る悪夢。と、少女の背中がついに木にぶつかつた。これ以上逃げられない。絶望と恐怖、嫌だと言おうが、トロールはその醜悪な容貌に笑みを張り付けて少女に向けて手を伸ばし

「誰か、助けて！」

吐き出される生への渴望。か弱い少女の、最後の抵抗。

瞬間、何の前触れもなく、トロールの手が横合いから伸びた手に掴まれた。

早森いなほは人類である以前に、喧嘩しか能のない糞つたれの畜生であると豪語するくらい、見た目も中身も筋金入りのヤンキーだ。茶色に染めて痛んだ短髪に、眼力鋭い目つき、二メートルに届くか

という長身の彼は、道端であえば誰もが道を譲るほどの威圧感を放っていた。

何よりもその威圧感の元となっているのは、鋼か何かと見間違うくらい屈強な筋肉だろう。世間的には細マッチョと言われるような、厚すぎない筋肉だが、筋の一本まで丹念に鍛えた肉は、そこらの鉄なんかよりも遥かに頑丈である。実際はただの細マッチョなどではない。見栄えだけの余分な筋肉を搭載しない、戦いに特化した攻撃的肉体こそいなほの自慢なのだ。

そんな男が、まさか積載量一杯の十トントラックに轢かれそうになった少年を庇って轢かれ、さらに吹き飛んだ先で落ちてきた鉄骨に潰されたあげく、鉄骨をどけようとした瞬間ガス爆発に巻き込まれたのはなんとという悲劇か。

ともかく何の気まぐれか、いらん正義感を発揮したいなほは、まるで少年を確実に殺そうとした連続攻撃を代わりにもらって、最後の爆発で結構な深手を受け気絶したはずだった。

普通は死んだと思うようなダメージの連続だが、いなほは自分が事故などというしょうもないことで死ぬなど考えもしなかった。せいぜい『もしかしたら骨折れたかもな』程度の認識である。

だが流石の彼も目覚めたらまるで自分に怪我がなかったということには驚きを隠せなかった。しかも世界各国のあらゆる文字と、地球にはない文字がいくつも浮かんだ空間にいて、目の前にそんな空間に似合わない革製の豪華なソファーに座る、ソファーに似合わないぼろぼろの黒いマントをまとった陰鬱な面持ちの男がいるとなれば、自分の正気を疑うのも致し方ないだろう。

「あー……なんだ、これ」

ガシガシと茶色に染めすぎて痛んだ髪を掻き耨り、いなほは男の前にまで歩み出た。

「で？ こんなとこに連れ込んだのはアンタか？」

「……」

男を見下ろすが、男はいなほを見上げて視線を交わすだけで、何かを言おうとはしない。ムカつく態度にいなほの頬が引きつる。ガキの頃から喧嘩っばやく、生粋のヤンキーとして生きてきたいなほにとって、自分を無視するような態度は、すなわち喧嘩の合図に他ならなかった。ただでさえ訳のわからない場所にいるのだ。いなほの沸点はすでに振りきれていた。

「テメー」

「例えば、水が上から下に流れるがごとき覆しようのない必然、それが運命だ」

その胸倉に掴みかかろうとしたタイミングで、男が口を開いた。ボソボソした声の癖に、何故か沁み渡るようにいなほの心に響く。出鼻を挫かれ、しかも訳分らない話をしだしたとなれば、いなほの動きが止まるのも仕方あるまい。

内心の苛立ちをぶつけるタイミングを逃したいなほは、釈然としない面持ちで、男の隣の空いてる場所に大股開きで座った。男の座るスペースすら侵略して座るのはせめてもの意趣返しか。だが男は特に気にしたそぶりもみせず、淡々と、やはり陰鬱なまま口を開く。

「だが、そんな必然を覆す者がいる。因果の否定、絶対運命の改変、激流に抗う矛盾存在。しかしその資格を持つ者が、誰しも運命を覆せる力を持つわけではない。大切なのは不倒不屈の強靱な鋼の意志。これがなければ、資格を持つのが因果の否定を行うことができない。現にこれまで、資格の保有者で運命を覆した者は一人しかいなかった」

た。お前で二人になったがな」

「へー」

話している内容など、県内最底辺の高校にぎりぎり合格した程度のいなほにわかるわけがない。いなほは男の言葉は話半分、周りの増えたり消えたりを繰り返す幾つもの文字を目で追うことに集中していた。

だが構わず男は話を続ける。陰鬱なまま、しかしどこか願うようなその口調。

「お前はあの少年の死の運命をその意志のみで打ち壊した。それで私は確信したよ。お前こそが私の望んだ者なのだ。だからお前をこちらに引き寄せたのだ」

「……おい、そりゃ」

少年とは、あの事故で庇った少年のことだろう。言ってることはさっぱりだが、知っていることならば興味はある。

「安心しろ。少年の因果の鎖は生存の方向に切り換わった。矛盾を嫌う世界の選択はそうらしい」

「なんだ、つまりガキは死んでないのか？」

「ああ。お前がそうした」

「……けっ、しぶといガキだぜ」

悪態とは裏腹に、いなほの表情はどこか穏やかだ。口は悪いが、

心より少年の安否がわかって安心しているのが見て取れた。

「……お前を待っていた」

安堵するいなほに、不意にそんなことを男が呟いた。いなほは眉をひそめる。当然だ、いなほには男との接点がるでないのだから。

「先に言っておく。お前はあの世界では死んだことになっている」

「道理が通らねえなあ。俺アこの通り無傷でピンピンしてんぜ？」

「怪我のほうはここに至る途中で私が治しておいた。軽い火傷と右肩の脱臼と骨にひびが入った程度だったのもあるが、専門外でも存外、何とでもなるものだな」

「つまりテメエが俺の怪我を治したってのか？」

「ああ、そしてその代わりに、お前にはこちらの世界に来てもらう。後は好きにやれ」

唐突な話に、いなほは言葉を失った。何を言えばいいのかもわからず、そもそもやはり言ってる意味がわからない。

当然、男はそのまま続ける。語りだすその顔は、僅かな安堵が現れていた。

「さて、今更だが自己紹介と別れの挨拶をしよう。私は第十一位『帰結運命』。名前はレコード・ゼロ。勝手にこちらに来てもらう上に身勝手な願いだが、どうか一つだけ私の願いを聞いてほしい」

突如、謎の空間に光が満ちていく。いなほはその急な変化を、何

故か当たり前のように受け入れていた。思えばそうだ、こいつの話は理解はできないし意味不明だが、何故か『受け入れられる』。

「おう。何だ」

だからいなほは、不思議と素直に男、レコードの願いを聞き入れようと思った。光に包まれ、何もかもが白に染められていくが、心中は穏やかなものだ。いつの間にかソファーに座っている感触もなくなり、自身の肉体も曖昧になっていく。

それでも、その陰鬱な言葉は、

「世界の運命を、打ち砕いてくれ」

どうしてか、頭にはなく、心の芯に重く響き渡った。

「……」

光が消えると、文字が浮かぶ部屋の景色が戻ってきた。果ての見えない広大な空間にただ一つ置かれたソファーには、先程まで座っていたいなほの姿はない。変わらず陰鬱な面持ちのレコードがただ一人。次々に浮かんでは消えていく文字群を見据えている。

「さよなら、いなほ。何、君がそのまま不屈なら、必ずまた出会うぞ」

紡ぐ言葉を聞く者はいない。だがそれでも眩くレコードの瞳の奥底には、薄暗い情念の炎が灯っていた。

第一話「祈る少女とぶっ飛びヤンキー」(軽傷)【(後書き)

次回、ヤンキー大地に立つ。

第二話【ヤンキーばんち】（前書き）

この小説は

筋肉 > 物理法則

となっております。

第二話【ヤンキーばんち】

目が覚めると太陽が眩しいくらいに頭上で輝いていた。

久しく感じたことのなかった土の感触と匂いが全身を包んでいる。

涼しげな葉鳴りを響かせる森の鳴き声が心地よい。

どうやら自分は倒れているらしい。混乱するでもなく冷静に、森の中にいることをいなほは理解した。

上体を起こし、ややまどろんだ頭でこれまでを改める。

ガキを庇った俺はトラックに轢かれ、鉄骨に潰され、ガス爆発に巻き込まれた結果、レコード・ゼロと名乗った男に助けられ、ここに飛ばされることになった。

そして、ここが地球でも日本でもないことも理解していた。別の世界であるという何となくの知識がある。

異世界。そう、異世界だ。今まで自分がいた世界とは別の世界。意味はわからないが体感的に理解はした。

ようはここが日本ではなく外国という解釈でいいのだろう。

「つまりアメリカってことだな」

いなほは単純明快な馬鹿だった。

ともかく、この知識はどうやらレコードの奴がどさくさに紛れて自分にもたらしたのだろう。頭の中に『そのまま送るのは不便と思っただのでな』というレコードの言葉が浮かぶ。

そう思うならなんで元の世界になんて返さなかったのか。別れが惜しいと思う奴も一応は何人かいるし、勝手に飛ばすのは道理が通らない等と悪態をつきたくもなるが、

「まあ、しょうがねえ」

起きてしまったことを愚痴るのは性分ではない。あいつが事故で怪我した自分を救ったのもまた事実。かつての世界に未練がないわけでもないが、こうなっては仕方ない。俺は切り替えの早いナイスな男なのだ。

などと自分を奮い立たせるついでに立ち上がる。ご丁寧に、黒のタンクトップとひざ丈の短パンにサンダルと、事故当時の格好はそのままだ。爆発で吹っ飛んだにも関わらず服装がそのままなのはいなほとしても助かる。全裸で森に置かれたらただの変態以外の何者でもないのだから。

体にも怪我ひとつない。試しにいなほは近くの木に向かって構えると、深く呼吸。サンダルを脱ぎ棄てて裸足になり、後ろ足を蹴り上げる。鞭を振るうように斜め上に走るつま先、それは木に着弾する間近、腰の回転も加えられさらに速度を増すと、轟音と共に木に叩きつけられた。

人の胴程もある幹が、いなほの蹴りの絶殺に負け、乾いた音と共に真横に折れる。その音は人外の一撃に負ける木の断末魔だ。トラツクに鉄骨、はてに爆発をもらって、ようやくちよつと危ない程度のダメージしか受けないいなほの保有する筋肉の堅牢は、攻撃という点に關しても無類の火力を与えていた。

まさに人類の皮を被った猛獣の一撃を、いなほは当然とばかりに領き一つで受け入れた。人にはありえない戦闘能力。だがそれこそが、彼を近隣の不良、果てはヤクザすら屈服させるに至った所以に他ならない。単純な筋肉の質量と、その過程で培った格闘術こそ、いなほが絶対の信頼を置く武器なのだ。

「う、し……体はまあ大丈夫か」

それだけ確認したいなほだが、さてここで問題が起きた。そもそも、自分はここで何をすればいいのだろうか。好きにやれとレコー

ドは言っていたが、自由すぎるのも困りものだ。

せめてどっかの町にでも置けよ。とサンダルをはき直しながら内心で悪態。ともかく、早く町に出よう。ズボンの尻のポケットには都合よく財布もある。新たな世界に飛ばすとか言っていたが、いなほ的には外国のどっかに飛ばされたのかもしれないと解釈した。だとしたら財布の円では意味ないかもしれないが、そこはあれだ、いざとなったら悪そうな奴捕まえて金を巻き上げればいいだろう。

呼吸を一回。排気ガスの溢れていた世界とは違う空気を肺一杯に取り入れ、その時には頭はもう冴えわたっていた。

「おーし、まずは真っ直ぐだ。んでム力つく奴は殴って黙らして金撒きあげて唾吐き捨てる。その後は……その後だ！」

行動方針が決まれば後は早い。いなほは快活な笑顔を浮かべ、へし折れた木を跨ぎ、真っ直ぐという名の適当な行動を起こそうとした瞬間。

その進路を遮るように緑色の何かがいなほの前に現れた。

「あ？」

思わず素っ頓狂な声が出る。

のっそりと現れたそれは、まさに異形だった。長身のいなほより、さらに顔一つでかく、腰巻一枚しかつけていないその怪物は、見た目も最悪だ。遠くでもわかる異臭に、豚を醜くしたような顔、体は丸々としており、どこか相撲取りを思わせる体だ。その手には一メートル以上はある木を削っただけの棍棒を持ち、明らかにこちらに敵意を放っていた。トロールと呼ばれる、この世界でも高い戦闘能力を誇る魔獣、それが今いなほの前にいる異形の名前だ。

普通の人間ならば、こんな化け物に会ったらその怪物然とした姿に怯え、一目散に逃げ出すだろう。だが、いなほはと言えば、その

姿を上から下までじっくりと観察したうえで、まるで変わらない、快活で、しかし犬歯を剥き出しにした凶相の笑みを浮かべた。

「おうおうおう！ 豚を腐らせて二足歩行にしたようなツラしやがって。デケエからって見下してんじゃねえぞ！？ ああん！？」

下から睨みつけながら、いなほが自らトロールへと歩を進める。人間には見えない生物だろうが、いなほには関係なかった。

こつちに敵意を持って現れたのならば、それが例え子どもでも女でも総理大臣だろうが一緒だ。

叩いて潰す。いなほの行動原理は単純だが、故に誰だろうがブレはしない。

トロールもいなほの戦意を感じたのか、静かに唸り声をあげて棍棒を強く握り直した。武器も魔法も使っていない人間如きが、こうして慣れたように自分へと向かってきている。例え猿並みの知恵しかないトロールにもプライドがあった。目の前の人間が自分を完全に舐め切っている。トロールにはそれが許せない。

「ガアアアアアアア！」

「うるせえぞ豚面あ！ ギャーギャー吠えりやいってもんじゃねえ！」

互いに臨戦態勢に入る。剥き出しの野性が衝突。後一步踏み込めばトロールの棍棒が直撃する距離で、いなほはサンダルを脱ぐと、両手の拳に力を込めた。

健康的な小麦色の肌が筋肉で隆起する。盛り上がる筋肉は、いなほの肌を引き裂いて溢れんばかりの力強さだ。

敵を睨み、犬歯を剥いて奥歯を噛みしめる。相手は訳もわからない豚もどき。だがビビらない、ビビった奴が喧嘩で負けるのだ。

猛る気持ちとは裏腹に、構えは流麗、静寂の水面を彷彿とさせる静かな動作だ。体をトロールに対して真横に向け、右手を掲げトロールへと向ける。左手は腰に、重心を低くして、大地に根を張るように構えた。

トロールの間合いより一步、いなほの拳か足には二歩、あの棍棒の威力は、トロールの体格的に見たら脅威だろう。だがいなほがトロールに一撃を与えるには、まず棍棒の一撃を掻い潜らなければならぬのだ。

大人でも容易にミンチにするだろう一撃。だがそんな一撃を前に、いなほが感じるのは恐怖ではなく歓喜だった。近隣では最早戦う相手はいなかった。幼少より暴力に染まっていたいなほは、そんな現状に飢えていたのだ。自分と戦おうとする奴とのイッチまうくらいに楽しい喧嘩にだ。

だからやろう。すぐにやろう。もう言葉はいらない。本能の赴くまま、いなほは自ら死地へと飛ぶように右足から踏み込んだ。

大気の震えを産毛の一本一本で感じる。頭上を焼く殺意の奔流。違わず走るは魔獣の怒涛。

「ガアアアアアアア！」

待ち構えていたトロールの棍棒が振るわれる。魔獣の怪力の乗った棍棒の速度は、太った体躯に見合わず早い。

迫りくる正面衝突の悲劇。

描かれる脳漿の飛び出す地獄絵図。

だがいなほは、避けるでもなく、まだトロールを射程に入れていないというのに踏みとどまる。否、大地を陥没させる程の凶悪な踏み込み。そして大地を破碎する運動エネルギーが、足の裏から盛り上がった下腿を周り膝へ。

膝で跳ねた力はそのまま大腿を駆け登り腰へと集束。溜まった力を腰を捻じり加速させて射出し、さらに倍加した力はタンクトップ

を圧迫するほど肥大した広背筋へと威力を連絡する。

その間にも回転した腰に引つ張られるように、いなほの左手は空気の壁を突き破る勢いで走っていた。背筋に溜まった力は余すどころか肥大させて左肩へ。筋繊維をサーキットに駆け抜ける衝撃は、発射先である拳目がけて突き進む。

尚もスピードを速める拳を押し出すように、左足で大地を蹴る。限界まで高まったエネルギーは、最後の押し出しを持って遂に爆発した。

「オラア！」

トッピングは獅子の雄たけび。物理的な破壊力と闘争心を乗せた極限の左拳が、その異常な反射神経を持って疾走する棍棒へと着弾を果たす。

いや、それは最早爆撃と言っているレベルだった。魔獣の怪力すら凌駕する筋肉と技術のハイブリッドは、触れた瞬間に棍棒を容易く砕いたのだ。

言葉通り木っ端となった棍棒の残骸が空に散る。だが、トロールは驚愕する暇もなく、遅く過ぎる映像の中で、確かにいなほの顔を見た。

凶悪に笑う男のなんたる恐ろしさか。こんなのは人ではない。魔法による強化も使わずに、魔獣の一撃を力で完封する規格外の突然変異のその一連。

ゆっくりと動く世界で、いなほは既に次の行動に移っていた。振りぬいた左拳を軸に、独楽のように回転しつつさらに一步距離を埋めるは大地を蹴った左足。トロールにとっての危険地帯、そしていなほにとっての必殺の間合いに入り込む。

魔獣の脳裏を過る壮絶な死の予感。一回転しながら、いなほの右足が伸びあがる、勢いのまま回転が体を倒すことで変則、横から縦に、円を描いて虚空を切る足の踵が、ただそれを呆然と眺めるしか

できないトロールのこめかみ目がけて、

「うるああー！」

咆哮に合わせて、直撃した。

胴回し回転蹴り。いなほの巨体には見合わぬアクロバットな絶技がトロールの頭蓋にて発生した。歪な顔は踵のぶつかった部分を大きく凹ませ、余計にグロテスクな変貌をした。そのまま重力を振り払って飛んだトロールが、勢いのまま木にぶつかり盛大に幹を揺らしながら力なく大地に屈する。崩れ落ちるトロールは既に着弾と同時に絶命していた。

「ハッ……根性だけはよかったぜ豚野郎」

トロールの骸の前に近づき、いなほはそう吐き捨てた。加減なく放った自身の全力。命を一つ奪ったことに対して、いなほが感じたのは清々しい心地よさだった。

全力を出せば人が死ぬ。故に出せなかった全力を出せたことは爽快以外ない。まあ相手には運がなかったと諦めてもらおうと、いなほは両手を合わせて合掌。

「しかし……何だあ、この生き物は？」

もしかしたら猿の仲間かなんかなのだろうかと考えるが、生憎と考えるのが苦手ないなほは、一分も掛からずにもいいかと結論した。どうせこいつは俺より弱い。ならそれ以上の意味はないはずだ。

切り替えは早く、とりあえずこういうときは埋めるのが礼儀なのかとよくわからん思考に至ったいなほは、早速トロールを埋めるための穴を掘ろうとした。

「って、随分ご機嫌な雰囲気じゃねえか」

だが、いなほの驚異的な闘争を嗅ぎわける嗅覚が、どんどん自分の周りに集まってくる気配を敏感に感じ取っていた。草木をかき分け大地を揺らす、巨人達の群れの行軍。

木々に阻まれ見えないが、おそらく十に届く程度だろうか。姿を現すトロール達、怪力無双の魔獣の集団。粘りつくような殺意の奔流が、いなほの本能を直接刺激して、アドレナリンを分泌させる。

「ああ？ 仇取りに来るたあ気合い入ってんじゃねえの」

指の骨を鳴らしながら、いなほは自分を取り囲むように迫るトロールに向けて笑った。

面白い。ここが何処かもわからないが、自分に対して『調子のいい野郎が吐いて捨てるほど現れるのは嬉しい限りだ。命のやりとりなど数える程しかやってないが、とどのつまり喧嘩と何一つ変わらないのは立証済み。』

どっちもビビった奴が負けるのだ。

「行くぞオラア！」

いなほは完全に周りを取り囲まれる前に、まずは真正面のトロールに突撃した。素手の人間の奇襲を予期していなかったのか、驚きたじろぐトロールへ「おせえ」と一言に合わせて、肥え太った腹に正拳突きを一撃。充分加速を伴った拳は、トロールの腹に深く入りこむと、まるでボールのようにその巨体を空に舞わせた。

血反吐を撒いて、トロールが地に沈むころには、新たなトロールを狙おうとしたいいなほ目がけて迫りくる二体のトロール。

「グオアアアアアア！」

「グラアアアアアア！」

「ハッ！ 絶頂だあ！」

高々と頭上に掲げられる二振りの棍棒。叩きつければ人間をたちまち弾ける血袋となす攻撃に応じるいなほの対応は、まさに常人の考えの外れだ。

「オオオ！」

変わらず落ちる木の塊を、いなほの両手ががちりと捕らえる。その衝撃にいなほの足首までが土に沈んだ。今まで感じたことのない強烈な重さに、いなほの両手がぶるぶると震える。単純な質量では圧倒的に負けるトロールの渾身を二つ、ただの身体能力でこれと拮抗するいなほの筋肉の異常は推して測るべきだが、少しずつ両手持ちの棍棒に押されて腕が下がり始めてきていた。

「俺、と、腕比べ、たあ、いいタマ、してやがる、ぜ………！ ぎい………！？」

歯を食いしばり、唸り声。盛り上がる両腕の筋肉は既に限界を訴え悲鳴を上げている。だが、普通ならトロールとの力比べなどというイカれた行動などせず、力を逸らすなりして棍棒をいなすのがこの場では最適な方法だろう。勿論いなほにはそれを成したうえで反撃する技量があるのだが、あえて彼はその選択を廃棄した。

男と男（？）の真っ向勝負で、力を逸らすなどというつまらない選択を選ぶなど馬鹿げている。

「アアアア……！」

だが内心の気合いとは裏腹に、いなほの膝は折れ、今にもトロール二体の怪力の前に屈服しようとしていた。その事実には喜びを覚えたのが他ならぬいなほだ。自分が窮地であることこそが楽しいと思うその精神は、まさに戦闘者としての本能か。

浮かぶ笑み。攻撃的な歓喜が、押されている自慢の筋肉を刺激する。まだまだ、この程度で俺が屈するわけがない。これ以上ないと思われた筋肉の肥大がさらに起こる。いなほの筋肉が、まるでアクセルを踏み込み勢いよく回転しだしたエンジンのように発熱し、あまりの熱量に蒸発する汗が湯気となって体から舞い上がった。熱した鉄か何かか、人類の規格を凌駕した筋肉は、今まさに鋼の如き変貌をなしていた。

「グギャー!?」

トロールが困惑の声を出す。押しこんでいたはずの棍棒が、何故か徐々に自分のほうへと押し返されている事実が二体の怪物に驚きを与えていた。

そして驚愕を叩きつけた本人はといえば、膝を持ち上げ、腕を突き出し、そして一気に棍棒を押し返したところで、幼い子どもの胸程度はある棍棒をただの握力だけで握りつぶした。

「ハッハー！ 最高だあああ！」

頼りの武器を失った二体にいなほは飛びかかると、鋼の腕で首にリアットをかました。分厚い皮と脂肪と骨に守られているはずのトロールの首が、それ以上の硬度を持つ肉体の爆撃によってたまらず破碎。一撃で命を刈り取られたトロール二体が沈むといなほも着地。さらに前には三体のトロール。焦らず中央の奴の懐に潜り込み、

鳩尾に拳を叩きこむ。

三度吹き飛ぶトロール。いなほは吹き飛んだ奴には目もくれず、左右にいる魔物を交互に睨んだ。戦いに飢えた獣の眼に見据えられ、頭の鈍いトロールですらようやくいなほという化け物が、自分達を大きく上回る戦力を持つことを理解した。

恐怖から、後ずさるトロール。だが既に戦意を失ったところで、全力での戦いに酔ういなほが攻撃の手を休めるわけがない。次はどいつをぶっ飛ばすか。両手を大きく広げて拳を作る。

「次い……よおやくよお。俺の小せえ脳みその奥のほうでギンギンしてきたんだ。もっと派手に決めようぜ」

左右に目配せ。ぶん殴りにこいと、あえて挑発するいなほだが、行けば死ぬのが確定している死地へ行こうとする程トロールは馬鹿ではない。

残された手段は少なく、故にトロールは、何も考えず尻尾を巻いて森の奥へと逃げ出した。

あまりにも唐突な戦いの終わりに、暫くいなほは馬鹿みたいに口を開けて遠くなっていくトロールの足音を聞き続ける。だが次第にその体がわなわなと震え、遂に爆発した怒りのままに地面を思いつきり踏みつけた。

「テッ……メエラアアア！ それでもタマあ付いてんのかあ！」

激昂。野獣のような絶叫をあげて、いなほは自分の左側にいたトロールに狙いを定めて走り出す。

まだまだ戦い足りないのだ。欲求不満で憤る心のまま、いなほは深い森の中を足音目がけて疾走を始め、

「見つけた……！」

その途中、運よく立ち止まったトロールを見つけて、いなほはそいつ目がけて襲いかかった。

第二話【ヤンキーばんち】（後書き）

次回、少女とヤンキー

第三話【ヤンキーと少女】

「おい。何がキに手えだそうとしてんだよ」

え、と疑問を口に出す。涙で滲んだ少女の視界に、トロールとは違う、不思議な出で立ちの男が立っていた。トロールより低いのが、充分に大きな体と、細いように見えて、綺麗な調度品のような筋肉は、太陽の光を反射して何故か神々しく感じた。

強い意志の籠った目は、変わらずにトロールへと向けられている。そして少女を掴むはずだったトロールの醜くぶよぶよとした腕は、男の逞しい腕に掴まれ、それ以上少女へ近づくことができなかつた。

「ギャギャギャ!?」

トロールの混乱は、突然の乱入によるものではない。たかが人間の腕の力で、自分の腕を全く動かすことができないことに混乱していた。怪物にとっての悲劇は、先程の戦いに参戦しておらず、男、いなほの能力を知らなかつたことか。

だが万力のようないなほの手が突如緩められてトロールは拘束から脱することができた。掴まれた部分はうっ血しており、緑色の皮膚にいなほの手形がくつきりと残っている。

「ガアアアアアアア!」

トロールが怒りのままに咆哮した。叩きつけるような声を聞き、少女はたまらず耳を塞いで縮こまる。そんな少女を庇うように、トロールとの間にいなほは立ち塞がった。

「あ、あの……！」

少女は、武器も持たず、魔法も使おうとしないいなほに危ないと声をかけようとしたが、恐怖から上手く声を出すことができない。いなほは少女に振り向くことはせず、ただ拳を天高く突き上げることで応じた。鉄塊を思わせる拳を少女は目で追う。光に濡れるそれはやっぱり綺麗で、見ているだけで体を捕らえていた恐怖の鎖が解かれていく。

「ガアアアアアアア！」

だがそんな少女を現実に戻すのはトロールの雄だけびとこちらに迫る地鳴りのとき足音だ。巨体を揺らし襲いかかるトロールに対し、いなほは掲げた拳を腰だめに、迎え撃つように腰を落とす。

「危ない！」

少女の悲鳴は当然だ。普通、トロールという魔獣を打倒するためには、装備を整えた兵士が数人、または熟練の冒険者でなければ打倒が難しいとされる生き物である。

だというのに、目の前の男は、肌の露出の多い衣服しか身に付けておらず、武器もなければ魔法を使う気配すらない。

言ってしまうえば生身一貫、己の肉体のみで肉体という点で人間を凌駕するトロールと対峙しているのだ。

「おう、ありがとうよ」

少女の叫びに、いなほの返事は場違いなまでに軽い。そこらに散歩にも行く気軽さだ。だが少女の悲鳴が当然ならば、いなほの余

裕もまた当然。ここに至るまでに、何匹ものトロールを葬りたいなほからすれば、今更一体どうしたところではない。

見慣れてしまった棍棒が頭上より来る。いなほは慣れた動作でそれを避けると、対象を失い前のめりになるトロールの顔面に、カウンターの拳を突き出した。

「そらあ！」

巨体を持ち上げ、拳は振り切られた。まるで体重がないかのように吹き飛ぶトロールが木と接触し崩れ落ちる。少女は人類が力で勝る魔獣に単純な力で勝った事実を目を見開いた。

「凄い……」

他に出る言葉がない。「チツ、野郎ども完全に逃げやがったか」
ぼやくいなほを、少女は驚愕一転、今度は神聖なものに祈る巫女のように羨望の眼差しを向けた。

「本当に、勇者様」

「あっ？」

声に釣られて、ようやくいなほは膝をついたままの少女を見た。
向けられる視線に込められた尊敬を感じてか、いなほはむず痒そうに頬を掻く。「あ……」何か言おうとするが、生憎と女さらにかギの対応なぞしたことのないいなほは、何を言っていないかわからず、とりあえず手を差し出した。

「立てよ。いつまでもケツ汚す必要はねえだろ」

「あつ……」

慣れないことに恥じているいなほの赤い頬を知らず、少女は差し出された大きくて固そうな掌に視線を移した。

たくましくて、鋼のように堅牢だというのに、大樹のごとき安心感のある無骨な手。少女はいなほの手をマジマジと見てから、次いで自分の掌を見た。土で汚れ、畑仕事と毎日の家事でひび割れかさついた自分の手。目の前の強くて傷も知らない鋼の手と比べ、なんと汚く、弱いのだらう。

そんな自分の手で、はたしてこの手を握っていいのか。逡巡する少女に、いなほはしびれを切らしたのか、その手を無理矢理掴んだ。

「ひゃ……!?!」

強引に立たされると、少女はいなほの大きさを改めて認識した。トロールに比べ低くはあるが、それでも充分人間にしては巨大な体躯と、その体がまとう細くしなやかな筋肉は、パツと見は確かに鍛えて入るが、トロールを打ち倒せるほどには見えない。だが、間近で見た今ならわかる。皮膚の内側の筋肉は、一本一本の繊維すら感じられるほどの力強さを放っていた。一体どんな鍛錬をすればこの境地にいたるのかわからない。

「やつぱし、勇者様だ」

だから少女は確信した。家に唯一あるおとぎ話の絵本。そこに描かれていた悪を打倒する強き正義の勇者。それが彼なんだと少女は信じた。

「勇者あ?」

だが言われた当人であるいなほとしては意味不明である。偶然助けた女が、何を思ったのか自分を勇者と呼び潤んだ眼差しでこつちを見ている。

とりあえず、立ち上がった少女が日本語を話していることに感謝した。天然だろう肩まで伸ばした金髪と、緑色の大きな瞳に、形のよい高い鼻、そして透明感のある白い肌の少女は、いなほの胸よりやや低い背丈しかなく、見た目の幼さと相まって、そこそこに可愛い少女ではあるが、いなほ的には後数年先に期待といった感じである。おそらく十四、五歳程度といったところか。ともかく、そんな見た目であったため、まさか会話が通じるとは思わなかったのだ。

それにしても田舎っぽい服装である。使い古されてよれよれのシャツと、足もとまで隠すぼろぼろのスカートとは、まだいなほの服のほうが丈夫であろう。靴もぼろぼろで、ただ底がある程度といった感じか。

まさか初めて会った人間が（いなほとしてはトロールは豚の進化系でしかない）ホームレスとは、内心少女に対して失礼なことを考えながら、まずはとばかりに、少女の手を握ったまま、力加減に気を付けてもう少し力を込めて握った。

「いなほだ。早森いなほ、俺の名前な。テメエは？」

「えっ！？ あっ……わ、私はエリス、です……あの、助けてください、ありがとうございます！」

少女、エリスは言い終わると同時に頭を勢いよく下げた。手を離したいなほは「まあそりゃついでだから気いすんな」などと感謝にむず痒そうにして眉をひそめ、照れ隠しを眩く。

流石勇者様、謙遜するなんてなんと奥ゆかしい。などと、エリスは勘違いをする。だが実際彼女の目の前にいるのは、勇者などという強く優しく凛々しい人ではなく、気合いと根性と喧嘩が大好きで

しかない場末のヤンキーでしかないのは何たる皮肉か。

「とりあえずよ、ここが何処かさっぱりなんだ。エリス、どっか近くの町まで道案内頼むわ」

「道案内……そうだ！ 皆！？」

突如、エリスはこれまで見せていた安堵の表情を青ざめさせた。そして弾かれるように走り出そうとして、足首から走る痛みにはバランスを崩しその場に倒れた。

「オイ！」

慌ててその体を抱きとめる。そこでいなほはようやくエリスが足首を痛めていることに気付いた。

「っ……村に、皆が……！」

「なんだかわからねえが、村にいきでえのか？」

エリスはいなほの問いに頷く。「あの……」お願いだから村の皆を助けて、そう続けようとしたエリスの頭に、いなほはその大きな掌を乗せた。

「理由は知らねえ。だが、状況は理解してるつもりだ。あの豚、お前の村に来たのか？」

「は、はい」

「任せろ」

掻き毟るように、エリスの頭をなでると、荷物を持つかのようにいなほはエリスの体を肩に担いだ。

「わわ！」

いきなり高くなった視界にエリスがたじろぐ。その反応が可笑しくて、いなほは口を弧にして笑った。

「んじゃ、道案内は任せたぜエリス」

「は、はい…！」

コクコクとエリスが応じて指を指した方角に向けていなほが駆け出す。

その一歩こそ新たな門出。不倒不屈の不良の冒険が、今始まる。

第三話【ヤンキーと少女】（後書き）

次回、ハイパーグロタイム

第四話【ぶっつんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり(前書き)

タイトル通りキツイ表現があるので閲覧には気をつけてください。

第四話【ぶつつんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり

「皆……！」

いなほの肩に担がれたエリスは、指をさして村の方向を示しながら、はぐれてしまった家族と友人を思い、焦燥感に駆られていた。森をまるで猿のような軽快さで駆けるいなほも、そんなエリスの横顔を見て、一層速度を速めた。

喧嘩で熱くなった思考はすっかり冷えている。改めて言えば、あのトロールはこれまでいなほが戦った生物で一番強かった。それでもいなほの敵にはならなかったが、問題なのは、あれが複数来た場合、はたして普通の人間が相手できるのかということだ。

いなほの中でのトロールの位置づけは拳銃で武装した人間よりも高い。走りながら、先程エリスの気晴らしになればと考えトロールのことを聞いたが（この状況の当事者についての話をする時点で気晴らしにはまるでならないが）、どうやらトロールはHランク相当の敵で、一体倒すのに武装した兵士が幾人も必要らしい。

そんな魔物が群れで襲ってきた。頭の悪いいなほだが、野獣の如き本能が状況が危険であることだけは理解した。

「間に合えよ……！」

加速しながらも、木々にエリスが当たらないように気を配りながら進むいなほ。エリスの焦りをわかるからこそ、彼の内心は逆に冷静になっていた。そして、話を聞いた上で、最悪な状況も脳裏に描く。

そして、遂に抜けた森の先に広がる光景は、いなほが思い描いた以上に最悪な結果そのものだった。

視界一杯に広がるのは、質素でありながら、それでも穏やかな空気と、暖かな人達が暮らしていたエリスの生まれ育った村の姿ではない。そこにあるのはトロールの群れによりなすすべなく蹂躪され、荒れ果てた村のなれの果てだ。

家屋は倒壊し、作物等を育てていた田畑は荒れ果て、その崩壊した村を、優しかった村人ではなくトロールが闊歩していた。その周りには村人達の見るも無残な死骸が転がっている。一撃で頭を砕かれた死体は、まだ幸せなほうだったかもしれない。手足を潰された少年の苦悶に満ちた残骸。

破られ、最早身にまとう衣服ではなくただの布切れを体に羽織り、トロールなのであろう汚い体液に穢された、この世で最悪に近い蹂躪を受けて絶命した少女の骸。その周りには少女とおなじように、トロールに鬩られ死んだだろ女達の死体が積み重なっていた。

張り付けにされて体中を殴られ死んだ者もいた。

もう死んでいるのにトロールに振り回され遊ばれている者もいた。棍棒の代わりに使われ、それを持ったトロール同士の試合に使われている者もいた。

「あ、うあ……」

エリスはそこまで見て、これ以上見るのに耐えられず嗚咽を漏らしながら目を閉じた。

トロール達は笑っている。下衆な鳴き声を轟かせて、村人達が大切に育てた食料を乱暴に食べ散らかし、村人達を『遊び道具にして』笑っている。

これが魔獣だ。人間が恐怖する魔獣の姿だ。躊躇なく人にとっての絶望を振りまく最悪の天敵。

「う、うえ……」

肩に担がれたままのエリスが、我慢できずに嘔吐した。手で押さえるが、溢れた内容物はいなほの体を容赦なく汚した。だがエリスにはそのことを謝罪する余裕もなかった。手で押さえる気遣いが出ただけでも上等だ。

そしていなほは、体を汚されていることを気にする余裕もなく憤怒していた。

「テメエら…… テメエ…… テメエら……！ やったな…… やりやがったな……！」

エリスが目を瞑っていたことは不幸中の幸いだっただろう。もし今少女がいなほの顔を見ていれば、あまりにも壮絶な険相い意識を手放していたに違いない。最早、いなほの形相は鬼のそれだった。だがどうにか残る理性でエリスを下ろすと、蹲る彼女には目もくれず前に、地獄を具体した村へと踏み込む。

いなほは生まれてこのかた死体を見たことは片手で数える程度にしかない。それですら事故にあった仲間や、抗争の結果頭を強く打つなどして運悪く死んだ奴と言った程度だ。このような直視すら難しい死体を見たことはない。なら普通はエリスのように吐いて、泣いて、蹲って、どうしようもない現実には打ちのめされるはずだ。

だがいなほは怒った。悲惨に憤怒し、激昂した。体の内側から沸き起こる感情の波は、いなほはひたすら前へと押し出す。気分を速度で表すなら既に音速は振り切った。白熱する鼓動と、連動して盛り上がる血流、五臓六腑を疾走する音速の鮮血は、いなほの骨と肉に際限なく沁み渡り起動を促す。

心臓がライブハウスのバンドの音楽のように五月蠅い。だが騒音のビートが今の自分には似合っていると頭の片隅でいなほは思った。なんせこのゲロを吐きたくなるような状況だ、狂った音が相応しい。

「ゴキゲンだ……随分とユカイな光景じゃねえか……！」

吐きだす吐息も熱を帯びている。浮かぶ笑みと言葉とは裏腹に、赤く沸騰するマグマのような心は奴らへの絶殺をすでに確定していた。

ようするに、いなほはこの状況に驚くでも怖がるでもなく、単純に『キレてしまった』のだ。

眼下の地獄へゆっくり歩み寄る。いなほの周りに浮かぶ怒気に感付いたのか、村で好き放題していたトロール達が一齐に森から現れたいなほを見た。

「ここが何処かもわからねえ。お前らが何なのかもわからねえ。でもよ……」

一歩一歩、踏み出す足はサンダルを脱ぎ棄てている。素足のままの歩行は、その一踏みごとに大地を揺らし、土を抉っている。土に沈む足はまるで雪原を歩いているかのような。それほどの踏み込みで歩かないなほの心境は、最早筆舌も出来ない。

燃えるような怒りを、殺戮を決定した筋肉が指し示す。抉れる大地は貴様らだと、足蹴にせんといなほが行く。

語るまい。告げる言葉は後一言だ。

「瞬殺だぜテムエらああああ！」

言葉に偽りはない。初速で最速、大地を抉る脚力の踏み込みは、いなほの近くにいたトロールにあった十メートルの距離を瞬く間にゼロにした。

そのトロールからしたら、まるでいきなりいなほが消えたように見えただろう。懐に潜り込んだいなほは、握りこんだ拳を腰だめにする、バネ仕掛けのごとき勢いでトロールへと解き放った。

吹き飛ばす であつたらまだよかつただろう。トロールの腹に直

撃したいなほの拳は、その肥え太った腹を貫通していた。背骨も砕き背中から飛び出た拳にまわりつく生温かく、腐臭を放つ臓腑を意識もしない。回復は絶対にさせないとばかりに、捻じりながら拳を引き抜くと、空いた穴から血が噴き出していなほを染めた。すっかり赤いじゃねえか。狂喜するいなほは鮮血を頭から浴びて嘲る。

「ガアアアアアアア！」

そこでようやく他のトロールも気付いたのか、二十を超える魔獣の群れが同胞が死んだことに憤り咆哮する。それまで遊び、または蹂躪していた村人をゴミのように放り出す様に、いなほの怒気がさらに膨れ上がった。

その尋常ではない狂気に気付くことはない。本来なら有象無象の人間など、トロールにとつて相手ではなかったはずだ。だが、この瞬間大勢は決まる。刈られる対象こそが己だと理解した時には、トロール達は全ていなほの人間の範疇を超えた理不尽すぎる筋力の暴虐によって、ものの十分もせずに壊滅するのだから。

殲滅に至る過程には意味はない。逆に蹂躪される側になったトロール達は、先程森でいなほの強さに怯え逃げた者と同じように、半数が容易く葬られた時点で逃げ出した。だが怒りに猛るいなほはその超人的な脚力で、鈍重なトロール達に追いつき、今度こそ逃がすことなく殺し尽くした。

「ふっ……ふっ……はああ……」

流石に疲れたのか、顔に付着した血を拭いながらいなほは肩で息をして、周囲への警戒を行いなながら呼吸を整えた。村にはトロールと村人の死骸が転がっている。戦いの最中、周囲に無事な人間がいるか確認したものの、無事に思える人は確認できなかった。

だがもしかしたら家屋の中にもいられるかもしれない。

「……その前に、だな」

いなほは森の手前で未だ蹲るエリスへと歩み寄った。体を震わせ、亀のように縮こまる少女の肩を叩こうとして、その手が赤く染まってることに気付き、寸でで止めた。

「おい」

変わりに、彼にしては比較的穏やかに（普通の人からしたら威圧的ではあるが）声をかけた。

だがエリスからの返事はない。何事かを呟きながら、一向に顔を上げようとはしなかった。

「……あいつらをあのままにはしておけねえからよ。墓あ作るから何かあつたら呼べ」

かける言葉が見つからないとはこのことだろう。普段相手にしている悪ガキなら叩いて無理矢理起き上がらせるが、相手は少女、しかも育った村の人間が蹂躪されているのを見たとなれば話は別だ。居づらそうに眉を潜めたいいなほは、辺りを警戒しながらも、トールの持つていた棍棒を拾い、素手で真ん中から『引き裂く』と、適当に開いた空き地で裂いた棍棒をスコップ代わりにして穴を掘り始めた。

「ったくよ。俺ア何やってんだかね」

事故にあつたと思つたら、よくわからん奴のいるよくわからん場所に飛ばされ、少し話したと思つたら光に包まれ。そして光が収まつたと思えば森の中、さらに見たこともない巨大で醜い豚もどきと

の盛大な殺し合い。

「それで、やったこともない墓作りたあ、俺もヤキが回ったか」

水でも掬うかのような手軽さで土を掘りつつ、自分の境遇に苦笑する。これまでも喧嘩に明け暮れた生活だったために、決して非凡な人生だったとは言えないが、こつも滅茶苦茶なことは人生で初めてだ。

あつという間に人一人分の穴を十個作れば、空き地に穴を掘るスペースはなくなってしまった。とりあえず掘った分だけ埋葬しよう、そう決心したいなほが振り向くと、そこには未だ泣きながらも立ち上がり、足を引きずりながらもいなほの傍に近づくエリスがいた。

「あー……大丈夫か？」

すぐ傍に来たエリスは、下を向いていなほを見上げようとはしない。

だからガキかつ女は苦手なんだ。髪を乱暴に掻き篦り、二の句を告げようとした瞬間、エリスは勢いよく顔を上げた。

「あ、あのー！」

「お、おお！？」

身を乗り出しながら叫ぶエリスの迫力に、さしものいなほも驚いたのか一歩後ろに後退した。

エリスの瞳は、さっきまで蹲っていたとは思えないくらい強い意志が見て取れた。いなほが穴をせっせと掘っている間に一体何が起こったというのか。

「私も、私にも手伝わせてください」

「手伝うってーと……墓か？」

「は、はい」

何度も頷くエリスに、いなほは先程と違った驚きを感じていた。何か知らないが、必死に目の前の死を受け止めたのだろう。そのいなほより遙かに小さく、弱弱しい細い体で、親しい人と、住み慣れた村の破壊を見て、しかし立ち上がった。

内心を知ることにはできない。おそらくはやせ我慢だろうし、ただ単純に現実を理解することを手放しただけなのかもしれない。でも、立ち上がったことは事実で、いなほはエリスに最初感じた弱いというイメージを訂正した。

彼女はその心の在り方が強いのだ。

だからこそ、少女の下した決断に対して、いなほは確然とした態度で、

「駄目だ。足怪我してんだ、邪魔だから失せろ」

そう言って、エリスの足首を指差した。

「あつ……でも、私……」

言われて、確かにただでさえ肉体労働もできないのに、足を怪我しているとなれば、邪魔以外の何者でもない。

それでも何かしたいと目で訴えてくるエリスに、困った風になほは頬を掻いた。

「思ってる……」

「え？」

「死んだ奴らを、思ってやれ」

目をまん丸に見開いて、エリスはいなほの言葉を聞く。

柄にもないことをしたな。いなほは恥ずかしさを隠すようにエリスに背中を向けると、空いてる空き地に向けて逃げるように歩き出した。

第四話【ぶっつんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり(後書き)

次回、暫くの世界説明

第五話【墓掘りヤンキー】

いなほの馬鹿みたいなた力ののおかげで、この村にいる人間、全員の墓は日が傾く前に完了していた。襲撃が起きたのが朝方だったというもあり、今はちょうど正午を少し過ぎたところだ。

「……」

一つ一つの墓に、エリスといなほは黙祷を捧げる。いなほは彼らとの面識はないが、その死を心に刻むために、こうして祈りを捧げていた。

エリスは果たしてどんな心境なのか。横目で目を閉じて祈る少女を見るが、神ならぬいなほでは少女の心の中までは分からない。

そうして全ての墓に黙祷を終えたとき、エリスは無数の墓をじっと見据えて、躊躇いがちに口を開いた。

「助けてもらったうえに、お墓も作っていただきありがとうございます
ました」

「感謝される言われはねえよ。俺が勝手にやったことだしな」

「でも、ありがとうございます」

「ちっ……そういうの、くすぐってえんだよ」

感謝の言葉には慣れていない。憎まれ口は照れ隠しだ。エリスはそつばを向くいなほが可笑しくて小さく笑った。

不意に大きな風が凧いだ。未だ村に籠る肉と血の匂いが二人の鼻

を攪る。訳もなくいなほは眉を顰めた。「もしかしたら、生きてる人がいるかもしれません」と、風が収まると同時にエリスはそんなことを言った。

「多分、半分くらいは逃げたと思います。その内の何人がが、もしかしたらマルクっていう大きな町に向かっているかもしれません……」

唐突に語りだしたエリスの言葉は、地理を知らないいなほには希望的な意見か、現実的な意見かの判断はつかない。

「それに、死んじゃった皆の中にお母さんとお父さんはいなかったんです」

「……そうか」

「もしかしたら私のこと心配して探してるかも知れません。もしかしたら明日にはマルクに着いて、すぐに人を連れてここに帰ってくるかもしれません」

「……エリス、そいつは」

「だか……ら。私、私……まだ皆、生きてて、生きてるって……私……生きてるんだって……！」

次第に穏やかだったエリスの言葉は途切れ途切れになり、遂にはへたり込んで大声で泣き始めた。ダムが決壊でもしたかのように、止めどなくエリスは泣きじゃくる。

いなほはどうしようか悩んで、エリスに手を伸ばし、その手に乾いた血のついているのを見て、少女の細い肩を抱こうとした手を途

中で引つ込めた。何でも通してきた自分の手が、この時はどうしようもなく頼りなく、小さい。

いなほは、思い出したかのように唐突にポケットをまさぐると、ありがたいことに入っていたタバコの箱とライターを取り出した。そして、タバコを一本口に咥えて、ライターを先端に近づける。火の灯ったライターに、タバコの先が燃やされた。そのまま息を吸い込み、タバコに火を点ける。

同時に口の中に広がる紫煙を、内に潜む無力感と共に肺へと取り込み、ため息をするように吐き出した。

「……………うるせえよ、エリス」

悪態は嗚咽するエリスには届かないし、聞かせる気もない。追いつかなかった現実が、いなほもようやく実感できた。

人が死んだ。他人だと割り切るには難しいくらい、あまりにも無残な形で人が死んだ。もし自分がもっと早くここに来ていたら、そんな仮定の話はどうしても考えてしまう。それは弱気だ。いなほはありもしない可能性を紫煙に紛らわせた。感傷など、らしくない。

今になって体に付着した血肉の臭いが嫌でも鼻についた。己もまた、初めて生き物を殺した。エリスの話では、あれは人間ではないらしい。それでもいなほは、躊躇いなく奴らを刈り尽くした。

そのこと自体には後悔はない。トロールもまた殺意を持って自分に接してきたのだから、あの場面でもし自分がビビっていたら、墓にいる野郎共と同じ末路を辿っていただろう。

だが殺したのだ。殺害、かつての世界なら逮捕され、罰を受ける重罪。犯してはならない禁忌。それをいとも容易く実行した自慢の五体。

心に引つかかることは何も無い。それこそが、いなほの心になによりも引つかかることだった。

「うえ……えう……」

まだ肩を震わせてはいるがエリスの鳴き声は次第に収まりを見せていた。涙で腫れた目がいなほを見上げる。

何も考える必要はない。タバコを啜えたまま口を弧に吊りあげて、いなほはエリスの視線を真向から受ける。

「とりあえず体が臭くてたまらねえ。シャワーかなんか貸してくれや」

今はこの、小さいながらも強い少女の傍にいよう。いなほはそう決心した。

第五話「墓掘りヤンキー」(後書き)

次回こそ世界観についての説明。

第六話【まっぴゃんキーと説明少女】

シャワーでは通じなかったのは流石に焦っていたいなほだが、どうか水浴びをしたいという意図が通じ、エリスの案内で二人は近場にある川に来ていた。

生まれも育ちもコンクリートに囲まれた世界にいたいなほの知る川とは、捨てられたゴミや様々な事柄が重なって生まれた底の見えない汚い水だ。そんなわけで当初は服を洗えればいいやというだけの考えだったいなほだが、目の前に広がる澄んだ水を見て、感嘆のため息を漏らしていた。

「こいつぁスゲエ」

「このくらいの川なら何処にでもありますよ？」

「俺のいた場所だとよ、底の石なんざ見えなくらい汚いのが当たり前だったんだ。その点この川のスゲエのはスゲエってもんよ」

「へえ……そうなんですか」

いなほは道案内のために肩に担いでいたエリスを下ろすと、サンダルを履いたまま川に入った。

肌に鳥肌が立つくらい冷たく、芯に来るほど気持ちいい。熱に浮かされた肉体がつま先から冷却される感覚は言葉にもできない清々しさをいなほに与えた。

「そつえばいなほさんは、何処から来たんですか？」

「あー？ 日本だよ日本」

「ニホン、ですか？ それって何処にある国なんですか？」

「お前、日本語話してるのに日本知らねえのか？」

驚いたとばかりに、水と戯れていたいなほはエリスに振り返った。川辺で適当な石に腰を下ろすエリスは、本当にわからないといった様子だ。

互いに首を傾げる。まあ別にいいやといなほは結論した。面倒なことは考えない、というかだるい。

「まっ、話せるなら別に構わねえか。つかエリス」

「は、はい」

「ここら辺のことについて知ってること教えろや。こちらから来たばっかで何も知らないんでな」

「ここら辺って……ならマルクのことでも話しましょうか？」

「マルクってーと……さっき言ってた町か？」

「はい！ 近隣の村の収穫物は基本的にあそこで売買しているんですよ」

エリスはそう前置きすると、マルクについて語りだした。

そもそもはアードナイ王国の左端にあり、周りを様々なダンジョンや森に囲まれている都市だ。アードナイを含めた四力国の国境に跨っていて、国家間の中立地帯となっている。だがすでに五年前、

アードナイの現国王によって、四力国同盟がなされているため、中立としての立ち位置は形骸化していたが、それでも昔から四力国の交流の場として使われていたため、現在も国同士だけではなく、様々な種族も入り乱れる町として賑わっている。そしてトロールも含めた魔獣の現れる森やダンジョンが複数あることから（マルクの都市内にも地下ダンジョンが存在する）、いくつもの冒険者ギルドの本部や支部が設立されていることでも有名だ。

「他にも魔法学院という魔法を学べる処もあって、マルクに住んでいる子どもから、近隣の村や遠くの国から来た子ども達がそこで魔法を学んでいるみたいなんですよ。そして学びながらギルドに登録して実戦も経験する　　っていなほさん何してるんですか!？」

語るのに熱中していたエリスがいなほを見ると、彼はいつの間にか服を全部脱いで川の水と戯れていた。

聞いてきたのはそっちなのに何で話聞いていないのかという苦情も浮かばない。慌てて顔を背けたエリスは「見ちゃった。見ちゃったよう……」と顔を真っ赤にしてぶつぶつと呟く。

いなほはといえば豪快なセクハラをかましたという自覚もないままに、汚れた服と体をせっせと洗っていた。ちなみにエリスの話など前置きの時点で聞いてはいない。

うーうー呻きつつ、エリスは顔を両手で覆いながらこっさり川へと目を向けては慌てて背けるを繰り返す。純朴で思春期な少女には、大の大人の全裸は刺激的すぎる。

「なんだエリス。さっきからチラチラチラチラとよ。言いてえことがあるならさっさと言いやがれ」

「もう！　いなほさんはそんな、ぜ、全裸で恥ずかしくなんですか!」

「悔るなよエリス。親からもらったこの五体、誇りはあるが恥ずべき点は何処にもねえ！」

「私は恥ずかしいんですよお！」

ちょっと涙声になりながら叫ぶエリスではあるが、その乙女の叫びもヤンキーにはどこ吹く風。軽くシカトして血のこびりついた服を洗う作業を再開する。

初めて会った時のあの神々しい勇者への尊敬の念はすでにエリスにはない。理想の勇者の姿が崩れていくのを感じながら、エリスはさめざめと涙した。

憐れは乙女の妄想か。彼女が大人の女性になる日もそう遠くはないのかもしれない。

「もう！ バカ！ いなほさんのバカあ！」

捨て台詞を吐いて、エリスは這うようにしてその場を後にした。痛む足がもどかしい。でなければこんなセクハラ現場には一秒だっていなかったのに。

でも、とエリスは父以外に初めて見た男の人の裸を思い出して顔をさらに赤らめた。白状すれば、いやらしい意味ではなく、いなほの裸はとて綺麗だった。鍛え抜かれた鋼の肉体は、一重に何かを叩くということに特化しているからこそ『美しい』。恥ずかしさもあつたが、それとは別に悔しい感情がエリスにはあつた。異性で体を比べるのも変な話だが、いなほに比べ、エリスは自分の肉体の貧相に落ち込みを隠せない。

「薪、集めよう……」

足は痛むが、走るといった無理をしなければ大丈夫だ。先程のことを忘れることも兼ねて、エリスは川の近く、あまりいなほのいる場所から離れないように薪になる木を探し始めた。

こうして薪を集めれば、つい昨日まで当たり前だった日々が甦る。涙目になりかけて、エリスは慌てて目元を拭った。思い出したら、辛くなってしまう。でもやっぱり思い出さないようにしても、家族の顔、友人の顔、優しい村の風景が脳裏に浮かび、涙腺を刺激する。でも今は我慢しないといけない。まだ生きている人もいるかもしれない。その希望があるから、あの惨状を見ても、エリスは何とか踏ん張っていられる。普通では考えられない心の強さだ。エリスは確かにただの田舎の村人だが、人一倍優しく、そして人一倍心が強い。

だけどやはりただの少女なのも事実なのだ。うつすら目じりに浮かんでいた涙が、一つ、また一つと、薪を拾う度に零れ落ちる。

「泣いちゃ駄目。泣いちゃ駄目」

自らに言い聞かせるように呟きながら少女は薪を集め続ける。苦しいけど、悲しいけど、そこで泣き崩れたほうが楽なのも知ってるけど、倒れたら前に進めないのがわかるから、エリスは決して膝を折らない。

そうして暫くして、彼女がその手一杯に薪を持って川に戻ると、ちょうどいなほも水浴びを終えたのか、下着一枚で川辺に寝そべっていた。

「いなほさーん！」

危なっかしい足取りでエリスが歩いてくる。いなほは立ち上がりエリスの元に行くと、持ってる薪を半分受け持った。

「ありがとうございます」

「気にすんな」

エリスは花のように微笑むと、手慣れた手つきで川辺の石をどけて、薪を組み立て始めた。

「何するんだ？」

「寒くないですか？ この水、年中冷たすぎるので村の中じゃ常識ですから、今火をつけますので温まってください」

下着一枚とサンダルだけのいなほを見てエリスは言った。実際にはそこまで寒くないいなほだが、好意を無碍にすることもあるまい。「おう」と軽く頷くと、火のつけかたなどわからないいなほは、エリスの作業を興味深く見た。

せつせと積み上がる薪は、いなほにはさっぱりではあるが火が付きやすいように組み立てられている。積み木を見ているかのようで見ても飽きない面白さがあった。

「よし……後は」

エリスは両手を軽くはたくと、静かに目を閉じた。何をするつもりなのか、いなほがその様子を見ると、エリスの体から蛍の光のような緑色の粒子が溢れだしてきた。エリスはこぼれだす光を集めるように右手を掲げると、人差し指と立てる。光は意思があるかのようにエリスの指先に集まると、淡い輝きを一層強くした。

幻想的な風景にいなほが言葉を失っていると、ゆっくりとエリスが目を開いた。

「『一握りの灯火よ』」

まるで世界中にでも響いたかのような、それでいて何処までも穏やかな声音と共に、エリスの指先の輝きが小さな炎に変貌した。

「おお!?!」

これで何度目の驚きか、突然の怪奇現象に声のないいなほを他所に、エリスは指先の炎を維持しながら、そつと薪に点火した。

ゆつくりと火が燃え広がり、エリスが指先を放して指先の火を消せば、薪の火は暖かい熱を伴ってゆらゆらと空に向かって伸びていく。

「さあ、体、温めてください」

薪を両手に持ちながら笑うエリスを、いなほはしげしげと見つめた。

舐めるような視線に晒されて、エリスはどうしたものかと右に左にと視線をやり、「あのー、いなほさん?」と声をかけた瞬間。

「デメエ! やるじゃねえか!」

その逞しい両手で、がっしりと肩を掴まれたのだった。

「え? ええ?」

混乱するエリスに、いなほは続けて「なんつうかスゲエ」とか「やるじゃねえかスゲエ」とか「全く予想外にスゲエ」等、エリスの体をゆすりながらスゲエスゲエと連呼する。

「あえ！？ あえええ！？」

だがゆすられるエリスとしては堪らない。自分は火をつけただけなのにどうしてこんなに体を滅茶苦茶にされなくちゃいけないんだとか、というかスゲエって一体何が凄いだとか混乱の極みだ。

暫くそこでは下着一枚のマツチヨに両肩を掴まれゆすられる薄幸少女の図が繰り広げられたのだが、いい加減目が回ってやばくなつたエリスが「やーめーてー」となさけなく訴えたことにより、いなほの意図しない危険行為は誰に見られることなく終わるのだった。

「おう、悪いなエリス。いやー、生まれてこの方光る人間も指から火を出す人間も見たことなくてよ。柄にもなく興奮しちまつたぜ」

「え、と……いなほさんは、もしかして魔法を見たことないんですか？」

「マホウ？ 何だそりゃ、武術かなんかか？」

全く知らないと言ついなほに、今度はエリスが驚く番だ。

「え！？ 魔法を知らないって……いなほさんいつもどんな生活してるんですか？」

「あー……あれだ、ム力つく奴をぶん殴って……つか俺のことは別にどうでもいいだろ！」

「ひい！？ じ、ごめんなさい！」

「わかりやいいんだわかりやよ」

いなほの剣幕に思わず謝ったエリスだが、実際は喧嘩して巻き上げた金で生活してましたなどと言えるわけのない、いなほの見栄のために謝る羽目になったとは露とも思っていないだろう。

ともあれ、魔法を知らないといういなほの言葉はエリスとしても驚きだった。

「この国、いえ、私の知る限りの世界だと、大なり小なり、魔法を使えるのは当たり前なんですよ」

「あ？ じゃあつまり、ここの奴らは誰でも指から火い出したり、体を光らせたりすることができんのか？」

「ええまあ……というか、そもそもいなほさんの言う光は、魔力って言っんですよ」

「魔力？」

「はい、魔力は誰にでも備わっている、魔法の源になるエネルギーです。例えば、この薪を魔力としますね」

エリスは片手に薪を持ち、ぷらぷらと揺らした。

「そして、その魔力に形をもたらすのが『式』です。先程私が詠いた詠唱。あの言葉に魔力を込めることによつて」

手に持った薪をエリスは火の中に投げ込んだ。音をたてて薪が燃え上がる。エネルギーは炎という形を得た。

「このように、魔法としてこの世に顕現します。でもただ詠唱するだけでは駄目なんです。詠唱する言葉に込められた意味を理解する

ことで、適切な形に組んだ式に、魔力という何にでもなりうる力を通して実態となす。普通は私のように火を出す魔法や、水を出す魔法程度なら、駐在してる兵士さんや親に、大きな町に住んでいたら魔法学院で教わるんです。」

「あー……つまり、その魔力つてのがあれば、俺も火を出せたりするの？」

「正しくは魔力単体だと意味はないんですが……いなほさん、魔力出せます?」

疑うようなエリスを、いなほは「ハッ」と鼻で笑った。

「んなのやり方わからねえのに出来るわけねえだろ」

「ですよね……」

堂々と言うべきことではないだろう、と内心でエリスはぼやく。

だが正直な話、エリスはいなほが魔法を使えないとは思っていなかった。何せあのトロールの群れを一人で殲滅したのだ。魔法を使った感じはしなかったが、もしかしたら無意識で魔法を使っているのかも知れない。とまで考えて、やっぱしそれはないとエリスは断じた。

魔法はただ魔力があればいい話ではない。膨大な魔力があれば越したことはないが、魔法には後にも先にも理解が必要不可欠だ。魔力とは、何かの形になる前のエネルギーである。それ単一は外界に光として現れる程度の影響力しかない。だが、魔力を扱う術者がそれに形を与えることで、外界に強い影響を与える力となるのだ。最もポピュラーな魔法は、言語魔法と呼ばれる、先程エリスが使った言葉に魔力を込めて、その言葉の意味に合った何かを顕現するもの

である。日常的に使っていて、最も簡単に理解が可能な言語魔法は、一番使われている魔法でありながら、奥が深い魔法である。ちなみに、強い言葉を顕現させるには強い魔力が必要である。他にも、体や道具に刻んだ刺青を媒体とする魔法等の、言語に頼らない魔法も幾つも存在する。

魔力を込めるものへの理解と、それらを組み立てて式とする応用力。単純な魔法ならともかく、魔法は優秀なものであればあるほどより深い学びが必要になってくる。それとは別に、ただ魔力を与えただけで効果を発揮する魔法具という物品も存在する。

閑話休題。では魔法を使えないといういなほは、ただ嘘をついているのか。と言えばそれも考えられない。半日程度の付き合いたが、エリスはいなほという男が嘘をついて人を騙すといった男には見えなかった。

「じゃあ何でいなほさんはトロールを倒せたのかしら？」

思わず零れた疑問、慌ててエリスは片手を口に当て言葉を飲み込もうとするが、吐いた言葉は掬えない。いなほはやはり得意げに笑うと、自慢の腕を軽快に叩いた。

肌と肌が弾ける乾いた音。「こいつ一本であいつら何ぞ余裕だったぜ」力瘤の浮き出る腕をこれ見よがしに見せていなほは言う。

それから誰も頼んでいないのに、昔行った喧嘩について語りだすいなほを、エリスは生温かい眼差しで見守りつつ、こう思った。

ああ、この人には魔法なんて必要ないや。

ぶっちゃけ、自分の魔法よりいなほの筋肉のほうがよくばど魔法らしいと、エリスは感じずにはいられなかった。

第六話「まっぴやんキーと説明少女」(後書き)

次回、感傷に浸るヤンキー

第七話【夜のヤンキー】（前書き）

場面ごとに更新してるので今回は短め

第七話【夜のヤンキー】

なんやかんやで先延ばしにしていた今後の予定だが、とりあえず今夜はまだ無事だった村の家屋に泊まり、明日マルクへの道を行こうということになった。

トロールの死体は村の端にまとめて積み上げたので、臭いは家屋の中までは来ない。この世界に来て初めての夜、いなほはエリスが寝静まったのを見計らって、外に出ていた。

空には色がそれぞれ違う五つの月以外に星はない。巨大な月のおかげで、電灯がなくても明るさは確保できている。だがいなほは異世界の幻想的な空模様には目もくれず、一人木々のざわめきしか聞こえない村の中央で地べたを見ていた。

「あいつ……手え握ったまんまだったな」

寝静まるまでの間、エリスはベッドの上で頑なにいなほの手を握って離さなかった。だいぶ明るくなっていたと感じたが、やはり心に負った傷は深い。ああやって笑っていただけでも奇跡なのだ。暫く彼女は悪夢にうなされるだろう。

エリスは今心細さに折れてしまいそうになっている。だがそんな彼女を置いて外に出てまで、いなほは今日のことを一人で思い返したかった。

「……強かったよな、あいつら」

巨体の化け物、トロール。感じた嫌悪感は抜きにして考えれば、あれはまさに極上の相手だった。これまで感じたこともない痺れるような闘争。夢のような時間だった。自分の力に対抗できる他者が

嬉しかった。

こんなことを考えてること、エリスには見せられねえな。自嘲して、でも考えずにはいられない。

ああ、殺戮に何も感じなかった。いけないことだというのに後悔は微塵もなかった。改めて自分が最低最悪な、喧嘩しか能のない畜生だと認めざるをえない。

「……ザマあねえ。結局、まともじゃねえのか」

喧嘩、喧嘩、喧嘩。いつでも自分はそれで、それしかなかった。その度、世話になった大人は『喧嘩はよくない』と諭してきて、自分はその大人に反発した。

タバコを取り出し火をつける。わずらわしい思いも全部紫煙に乗せればいい。殺戮に歓喜する自分に、言いようない違和感を感じる。この心ごと吹き飛ばすように。

「折り合いつける早森いなほ。ここで、生きていくんだからよ」

月に向けて拳を突き出す。迷いはないが意味のないこの拳に、いつか答えを掴むことができるのか。そんなことを考えながら、いなほはエリスの待つ家屋に戻るのだった。

第七話「夜のヤンキー」(後書き)

次回、怪奇!肩車ヤンキー

第八話【ヤン車、疾走中】

慣れない寢床での就寝だったために、いなほは若干寝不足気味だ。エリスが何度も悲鳴を上げながら飛び起きたのもそれに拍車をかけていた。

互いにうつすらと隈を目じりの下に浮かばせた二人は、まだ残っていた食料で食べれそうなのを適当に選び出し、朝食を取りながら今後のことについて改めて話し始めた。

「んでよ、普通に道進めば半日でマルクってえところには着くんかな？」

「は、はい。私は後から行くので、いなほさんは先に」

「アホ、担いでくに決まってるんだろ。ここら辺のことはさっぱりなんだ。テメエは黙って俺の道案内をしゃがれ」

照れ隠しに悪態をつきながら、いなほはエリスの足を見た。

エリスの痛めた足首は現在、トロールの腰布を川で洗浄し、適度な形に破いた物を使って固定してある。動かさない分には痛まないだろうが、半日を歩くには心もとない。

なので基本方針は、いなほがエリスを担いでマルクを目指す。こっとう方向で決定した。

「おし、善は急げだな」

「わわっ！」

食べ物を胃に詰め込み終わると、いなほはネコでもつまむような手軽さでエリスを持ち上げ、その両足を自身の首にかけた。所謂、肩車というやつだ。思春期ど真ん中のエリスとしては、大人の男の首を足で挟むというのは抵抗のある行為だったが、そんな気持ちも高くなつた視界から眺める景色を見てすぐに吹き飛んだ。

「わあ！ 高い高い！ すっごい高い！」

「へっ、気に入ったかよ。おら、行くぜ？」

「はい！ ー！ー！」

天高く片手を突き上げて、エリスは元氣よく声を張り上げた。気合いのこもつたいい叫びにいなほもご機嫌だ。「悪くねエー歩だ」と呟くと、村の入り口から遠くに続くろくに舗装されていない、ただ草の生えていない道へと踏み出す。

空は快晴で、雲一つもない。うっすらとだが五つの月の姿も見れるのは異世界ならではだ。視界一杯に広がる広大な草原を眺めながら歩くだけでも飽きが来ない。道を中心に左右百メートルは草ばかりで、その向こうに森が広がっている。時折感じる気配は森のほうからのものだ。

おそらくは魔獣というものだろう。だが襲つて来ないのならばこちからわざわざ出向く必要もない。左右への警戒は最低限にとどめ、目の前の果ての見えない道を見据える。彼方まで広がる道と、彼方まで続く空。どちらも地平線を超えて続いている。

「まずはこの道を歩いて、癒しの森に入ります。あつ、癒しの森っていうのはここらの人の言っている別名で、本当は第三十二制圧森林っていうらしいです。なんでも国が森に入る危険な魔物を排除して、魔獣の嫌う匂いを放つ魔法具と、結界を周囲に展開して、いる

のはちょっとした動物くらいなんです。資源も豊富ですし皆から重宝されているんですよ」

当然だがエリスの話をいなほは全く聞いてはいない。「ふーん」と投げやりに返事をしつつ、サンダルを脱いだ。そしてエリスを落とさないようにそれを拾うと、よくわかっていないエリスにサンダルを持たせ、

「走るぞ！」

突然走り出した。

「キヤア！？」

「しっかりつかまってる！」

どうでもいい説明を遮るために走り出したが、思いのほか効果はあつたらしい。速度は抑えてはいるものの、馬に乗ったかのように過ぎゆく景色を見てエリスははしゃいだ。

ともすれば、馬の脚力をそのまま維持してしまったいなほは日が頂点に登る前に癒しの森へとたどり着いたのだった。

大きく、存在感のある立派な木々が並び立つ森の一部に、ぽっかりと穴が空いたように道が続いている。どうにも甘ったるい匂いがするので、いなほは不快だと顔をしかめた。この匂いが魔獣の嫌う匂いだというのが。しかし、魔獣の侵入を防ぐという結界は何処にも見当たらない。

「なあ、その結界って奴はどこにあるんだ？」

「結界は目に見えませんが、確かここにある結界は魔獣を弾くと

かじゃなくて、何となく行く気を削がせる特殊な術を張っているとか」

「ようは入り口に糞撒いて来させないようにしてるわけだな」

「……最低な例えですけど概ねその通りです」

気落ちした面持ちでエリスは肩を竦めた。下品すぎる。会ったことではないが、盗賊とかつて皆こんな風なのだろうとか考える。

いなほはエリスの表情も心も知らず、彼女が落ちないように、座りやすい位置にしようとして体を揺すり、ちようどいい感じに収まっ
てから森に入った。結界というのがどういったものかわからず緊張したが、特に何も起こらず入れて些か拍子抜け。

「エリス！ 飛ばすから枝には気をつけるよ！」

「わかりました！ ごーですいなほさん！」

「おう！」

再び勢いよくいなほが走り出す。最初、いなほがエリスを担いで走った森と違い、ちゃんとした林道となっているため速度を落とすことはない。はしゃぐエリスは気付かぬが、まさかいなほが現在標準的な馬の速度以上のスピードで走っているなどわかるわけもないだろう。

言うなれば筋肉という鉄壁に覆われた戦車。立ち塞がる物をことごとく排除する浮沈の陸上兵器といなほは化していた。

「馬よりもずっと速い！」

「ハッ！ 馬程度に俺が負けるわきゃねえだろうが！」

無敵の人力ヤン車が、少女の声をドップラー効果で響かせながら森に行く。後に様々な場所で『怪奇！ 肩車魔獣』と呼ばれる七不思議となることを、この時の二人は当然知るよしもないのであった。合掌。

第八話【ヤン車、疾走中】（後書き）

次回、新しい現地住民とヤンキーの異文化交流

第九話【ヤンキーの威を借る少女と女騎士】

女冒険者、氷結の騎士の二つ名を持つ女性、アイリス・ミラアイスは、長丁場だったゴブリンキング率いるゴブリン軍団の討伐を終えて、マルクにある自宅に帰る途中であった。

Ｆランクの実力者であるアイリスとはいえ、ゴブリン達の拠点の入念な調査に、その間にも村を襲うゴブリンから村を守る警護。一か月もの間それらを行っていたため、ようやく終わって気が抜けたせいか、やや疲労の色が濃かった。

「ふう……さて、この調子なら日が落ちる前にマルクには着くか……時間的にギルドへの報告もできるし、面倒はさっさと片付けるに限る」

着いてからの予定を言うことで、気を引き締める。

とは言っても精神的な疲労は積もっており、少しばかり気を緩ませてしまうのも無理はないだろう。魔獣が出ない森の中というのも緩みに拍車をかけていた。まあ、盗賊に襲われる危険はあるが、ランク持ちの盗賊などそうそう現れるわけもない。油断してても、盗賊程度なら軽くあしらえる自信がアイリスにはあった。

暫くは依頼も受けずのんびり休もう。そうしよう。絶対に一週間は家でごろごろする。脳裏で描くのは自堕落な生活だ。周りからは規律に厳しく、己や他人にも確然とした態度で接しているため、頭の固く凛々しい人間だと思われるが、本人からしてみれば心外である。ただ単に女だからと舐められないように厳しくしているだけで、私生活では自分に甘いアイリスである。

甘い物を一杯食べて、ご飯は出前で適当に頼む。そういえばまだ読みかけの小説があったはずだ。ついでに帰る途中に小説も何冊か

買って帰ろう。浮かれて逸る気持ちを抑えようとはせず、緩んだ笑み
が顔に浮かぶ。

「よしよし、俄然やる気が……ん？」

ふと、葉の擦れる音と鳥の囀り以外の何かが耳に響き、アイリス
は後ろを振り返った。

地鳴りと、甲高い 笑い声だろうか？ が聞こえてくる。馬車
か何かが来ているのだろうか。ならば邪魔にならないように横にど
こう。

次第に大きくなる地鳴りのような足音を聞きながら、アイリスは
道の端に移動して、馬車が来るのを待つ。

音はどんどん近付き、少女のらしき笑い声も大きくなる。楽しげ
な声に思わず口元が緩んだアイリスは、途端、笑顔を凍りつかせた。

「な、な……」

「もっともつとー！」

「飛ばすぜえ！」

姿を現したのは馬なんかではない。少女を肩車した見たこともない
服を着た長身の男だった。それだけならまだ何とか動揺はしなかつ
たかもしれない。

こちらに向かってくる男は、魔法を使っている様子もないのに、
煙りを巻き上げて馬以上の速度でこちらに迫ってきていた。出鱈目
だ。あんな身体能力、人類であるはずがない。いや、それでも氷結
の騎士と呼ばれているアイリスなら動揺しなかつただろう。だが視
力がよく、戦闘経験も豊富なアイリスは、迫る男の顔をはつきりと
捉えていた。

まるで獲物を狙う野獣のような獰猛な笑み、細く延ばされた眼は、背筋を凍らせるほどの威圧感を放っていた。怖い、怖すぎる。アイリスは混乱した。しかも見ただけであの魔獣如き男が、アイリス以上の戦闘能力を保有するのがわかってしまった。というか強化の魔法も使ったように見えないのにあの速度を出してる時点で、人間でないのは明らかだ。エルフでもドワーフでもないだろう。あれは鬼とかそういう類の化け物だ。

そう、氷結の騎士、アイリス・ミライスは、楽しそうな笑い声を上げる少女を肩車して物凄い速さで駆ける男、早森いなほの姿を見て、あまりに人間離れした姿に恐怖したのだ。

「な、なんだあれは!?!」

見たこともない物 サンダル を両手で振り回しながら笑う少女を肩車して、加速しながら向かってくる物凄く怖い笑みを浮かべた男。怖い。何が怖いってもうあれだ、怖いのだ。

「た、『戦いの力をこの身に』!」

慌てながらも身体能力を上げる魔法を瞬時に展開すると、青色仄かな光がアイリスの体を包んだ。そしてこっちに来る化け物に向けて剣を抜きはらう。逃げようにも速度からして追いつかれるのは明白だったので、最早迎え撃つしかないと思ったのだ。

「魔物はここに来ないんじゃないのか……!!」

悪態をつくアイリスは恐怖とない交ぜになった敵意を迫る魔獣に向けた。まさか依頼を達成して気が抜けていたこの瞬間に襲撃とは覚悟を決める。すぐにでも切りかかれるように剣を構えるアイリスに対し、魔獣扱いはされているいなほはいえ、やはり獣染みた本

能で敵意を察知。アイリスの剣が届く範囲外で急停止した。

「何だデメエ」

未だエリスを肩車しながら威圧してくる姿はシユールだ。だがそんなシユールを感じる余裕のないアイリスは、魔力も伴わないただの眼力に冷や汗をかいた。間近で対峙してみても改めてわかる。醸し出される強者の威圧感。ランクにしたらD、いや、もしかしたらCランク相当だろうか。自分には勝てる要素がほとんどない。ならば狙いは少女を肩車している今だろう。僅かな隙を見つけ出し、一瞬に全力をかけて、一撃でケリをつけるしかない。

覚悟を決めたアイリスの構える姿に隙はない。面白そうな女だ、警戒心剥き出しのアイリスに、凶悪な笑みをいなほは向ける。

一触即発の空気、切っ掛けがあれば即座に戦いが始まる張りつめた空間。だがそんな空気を壊したのは、いなほの怖すぎる顔を見ていないエリスだった。

「こんにちは」

以前までなら、冒険者に簡単に声をかけるなどエリスにはできなかっただろう。だが虎の上にいるハムスターというだろうか、強者に守られ、そして体験したこともない楽しい経験に昂った心が、エリスに見知らぬ冒険者に自分から声をかけるといった行動に移させた。

呆気にとられたのはアイリスといなほだ。互いに臨戦に入ったからこそ、エリスの間の抜けた言葉は、鬪争の秀囲気を盛大にぶち壊しにしていた。

「……………ああ、こんにちは」

返事を返して、何やってんだと脳裏でぼやく。幸いだったのは、依頼後に気が抜けていて、なお且つ馬以上の速度で走る男と担がれて笑う少女というよくわからない光景に出くわしたために、彼女を持ってしても混乱していたことだろう。いなほはと言えばすっかりやる気を削がれて、つまらなそうに欠伸をしていた。

挨拶を返されたエリスは可憐に微笑む。

「今日はいい天気ですね」

「そうだな。まあ、冒険にはもってこいだろう」

「わあ、もしかして冒険者さんですか？」

「ああ、そうだが」

「凄い！ 私、冒険者さんとお話するの初めてです！」

「そ、そうか。いや、そんな尊敬の眼差しを受けるほど、私は大層な人間ではないのだが」

「そんなことないですよ！ 凜々しくてかっこいいです！」

「ハハツ、照れてしまっな」

「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね。私、エリスって言います。それで、この人は早森いなほさん」

ペチペチといなほの頭をサンダルで叩く。いなほの顔の血管が浮き出たのを見て、アイリスは逆に血の気が引いた。止めて、お願いだから私のために彼を叩くのを止めて。

「……私は、アイリス・ミラアイスだ」

「よろしくお願いします！ ほら！ いなほさんも！」

「……おう」

何というか、毒気を抜かれた。ニコニコ笑うエリスをしり目に、アイリスといなほは互いに視線を合わせる。

そういうことだ。

そういうことか。

どっちがどっちというわけではないが、アイコンタクトは成立した。アイリスは魔法を解除し剣を鞘に収める。いなほも改めてアイリスのを見た。

エリスよりも明るい金色の髪は首元で短く揃えられていて、とても柔らかそうだ。目鼻はくつきりとしており、吊り気味の目は深い青色の瞳も相まって冷たい印象を覚える。身長はいなほの肩程度、膝まで覆うマントの下には、要所に鉄の鎧らしきものを付けており、腰にはよく使い込んだ剣が一つ。荷物は肩に担げる程度の荷袋だけか。

そんな美しい女性剣士に対し、喧嘩してえなというのがいなほの感想だ。彼にとつて容姿はさして重要ではないのだ。エリスなんかはカッコいいだの騎士様みたいだの騒いでいる。頭の上で五月蠅い。いなほの苛立ちがさらに膨れ上がった。

不穏な空気を察したアイリスが慌てていなほに声をかける。

「すまない。何せ馬よりも速く走る人間と、それに担がれ笑う女子など見て驚いてしまつてね」

「氣いすんな。俺としてはそのまま喧嘩でもよかつたんだがな」

「ハ、ハ……君は怖いことを言うなあ」

アイリスは苦笑した。正直、冒険者としての勘がこの男と真つ向からの戦いをするなと訴えていたから、その冗談は洒落にもならない。

実は本当に喧嘩したかったと知ったら、アイリスは全力でこの場から逃げただろう。

「で、見たとこ君は不思議な格好をしているが、何処から来たんだい？」

「ああ、日本から来た」

「ニホン？ すまない。知らない土地だ」

「仕方ねえよ。ずっと遠くにあるしな」

男くさい笑みを浮かべたいなほは、「それより」と笑顔から一転威圧的な眼差しで肩車したエリスを両手で掴むと、自分の真正面に持ってきた。

よくわからないと言ったエリスの背中の部分の服を掴むと片手でそのまま持って、

「俺の頭を気易く叩くんじゃねえ」

出来るだけ手加減して、その額にデコピンをかました。

「ぎゃひゅー！」

少女にあるまじき悲鳴とともにエリスの顔が勢いよく後ろに仰け反った。手加減しようが筋肉ダルマのデコピン。ただの少女でしかないエリスには強烈すぎたのだろう。そのまま脳震盪を起こして気絶してしまった。

「……………彼女、大丈夫？」

「手加減したから問題ねえよ」

いや、手加減したとかそういうったレベルの問題じゃないだろう。と、喉元まで出てきたがアイリスはその言葉を飲み込んだ。

触らぬヤンキーに祟りなし。変な奴らに会ってしまったなあと、自身の境遇に嘆かずにはいられないアイリスであった。

第九話【ヤンキーの威を借る少女と女騎士】（後書き）

次回、街到着

第十話【ヤンキー街に着く】

エリスがデコピン脳震盪という、人間が初めて経験しただろう体験から覚醒すると、ちょうど森から抜けるところだった。

「うーん……」

「ああ、起きたようだねエリス」

「あれ……えと、アイリスさん？」

「そつだ。名前、覚えていてくれたのか」

優しく微笑むアイリスの横顔が近い。というか、これはもしかしなくても、アイリスにおんぶされているようだった。

「わわ！ すみません！」

慌てるエリスに「いいのいいの」と諭しながら、背中から降ろそうとしない。

「何せ彼が君を持つやり方は、まるで荷物か何かを扱つような感じだったからな。あれは 冒険者として見過ごせない」

冷たい視線をアイリスはいなほに向けるが、応じるいなほはどこ吹く風。というか人の荷物を振り回すのは止める。

「あー、さっさと着かないのか？」

「もうすぐ、ほら、森を抜けたらすぐだ」

斜光の射す癒しの森の林道の先、明るい光と草原が広がる道を見てアイリスは行った。

「お！ おいアイリス、エリスは返してもらおうぜ！」

言うが早くアイリスの荷物を手放し、エリスを引っぺがすと、あの化け物染みた速度で森の出口へと走り出した。

「ちよ！？ 乱暴すぎるぞいなほお！」

アイリスの怒声が遠くなる。まだ寝ぼけ眼のエリスはなされるがまま、いなほに担がれ森を抜けて、差し込む光に目を眩ませた。

「スツゲーじゃねえか！」

いなほが興奮したように叫ぶ。森を向けた先、およそ一キロ先に長大かつ巨大な城壁が見えた。石で組まれた壁は、横の長さはどの程度あるのかも検討がつかない。高さも充分にあり、道の先には巨大な門がある。数々の道が門のほうに集まっており、大勢の人が門目指して歩いていた。

「中立都市マルク。別名、冒険者の集う町。四力国同盟以後もこうして交流の場として栄えている。古くからの名所だ」

追いついてきたアイリスが、目を輝かせるいなほを横目にしながら説明をした。しかしこの男、まるで子どものようだとアイリスは内心で思う。凶暴な性格ながら、子どものように純真無垢。てかガ

キだ。こいつはただのガキだ。

「おいエリス！ やつと着いたぞ！」

「は、はい」

再び首の定位置にエリスを乗せる。アイリスの頭に、どうしてか子連れヤンキーなる訳分からん言葉が浮かんだ。駄目だ自分、超疲れてる。

「門では簡単な検問を受けるんだ。と言っても諸国の冒険者も集うからな、正確な身分ではなく、確認するのは犯罪者リストに載ってるか載ってないかの検査くらいだ」

「そうか。じゃあ行こうぜ」

絶対聞いてない。だがもういいかと半ば諦めて、アイリスは先行するいなほに着いていく。

門までたどり着くと、改めてその巨大さにいなほは驚いた。日本の雷門並みにでかい木製の門の前で、門番が手元の手帳と検問する相手を見比べて、何かの確認が終わったら通している。

「何してんだ？」

いなほがアイリスに尋ねる。

「あれが犯罪者リストさ。四力国で指名手配されてるあらゆる事件の犯人の名前、顔が登録されてる。相手を見るだけでリストが自動で検索をして合致するかどうかを見てくれるんだ。しかも幻覚魔法無効のおまけ効果もある魔法のアイテム。ちなみに凄く高いよ」

「うっし、俺らの番だな」

「やっぱ聞かない……」

どうにでもなれと、いつものクールな雰囲気を崩して泣きそうになるアイリスを無視して、いなほはエリスを肩車したまま門番の前に立った。

「へえ、珍しい服着てるな兄ちゃん……その嬢ちゃんは妹かい？」

「そんなとこだ。ここには初めて来るからよ。一つよろしく頼むぜ」

「ハハツ、よろしく頼むのは俺じゃなくてこの手帳のほうさ。あんたが悪さしてなきゃしっかきこいつが許してくれんぜ」

「ならそいつのご機嫌とらなきゃならねえな。キスでもすれば通してくれるかい？」

「そんなことしなくてもあんたがいい男だから通すつてよ。よし、嬢ちゃん共々確認完了。ようこそ色男。中立都市マルクへ」

「ありがとう」

ひらひら手を振ってマルクへと入っていくいなほとエリス。続いてアイリスが門番のほうに行くと、「おう」と門番は親しげにアイリスに声をかけた。

「ようアイリス久しぶりだな。依頼のほうは大丈夫だったよか？」

「この通りな、帰り際に面白い奴らに出会ったがね」

そう言っただけでアイリスはいなほ達を見る。アイリスの視線を追った門番は特に驚いた様子もなく頷いた。

「嬢ちゃんは別として、あの大男はなんだ？ 久しぶりにヤバい匂いがしたぜ」

「私もだ。遭遇したとき殺されなくて本当によかったよ」

「……あんたがその手の冗談を言わないのはわかってる。強いのか？」

「わからん。だが、真つ向からやるのは勘弁したいな」

そのアイリスの言葉に、険しい表情になる門番。「そろそろいいか？」そうアイリスが言うと、慌てて門番は頷いた。

「だがまあ悪い人間ではないらしい。悪いくらいに我がままだがな」

そんなことを去り際に言い残し、アイリスは何食わぬ顔で待っていたいなほ達と合流した。

「スツゲー」

いなほの隣に立ったアイリスは、立ち止まったままの彼が辺りを見ながら興奮しているのを、我がごとのように喜んだ。誰だっ自分分の故郷を喜んでもらえてうれしくならない人間はいない。

門を抜けた先はすぐに様々な露店が立ち並ぶ街道となっている。狭しと並ぶ色とりどりの店と、忙しく動く人々、活気に溢れると

という言葉がまさによく似合う光景だ。

「門の先は商店街となっていてな。この通り露店の他にも、ここの家屋のほとんどは商店か宿屋となっている。冒険者が装備を整えたり休息によく使うんだ」

「美味しい物とかあるのか？」

「そうだな。まあ出ている食べ物のほとんど外れはないだろう。それよりいなほ、君は、君達にはやることがあるんじゃないか？」

アイリスの嗜める言葉に、いなほも喜びを抑え込み、肩車したエリスを見上げた。

エリスの表情は険しい。僅かな希望として、エリスの村の人がいる可能性を信じてはいるが、もし誰もいなかったらと思えば

エリスが気絶している間に事の次第は聞いていたアイリスは、エリスに「大丈夫」と言って安心させるように笑いかけた。

「まずはギルド街に行こう。私のギルドのほうで本部に掛けあってみる」

「お願いします」

エリスが頭を深く下げる。いなほも頷いたので、三人は一路商店街を抜けて、ギルドの立ち並ぶギルド街に向かうのだった。

マルクの町は四つのエリアに分かれている。いなほ達のいる商店街。今から向かうギルド街。総学生三千人以上を誇る魔法学院。そして居住区。この四つからなっている。といってもただ四つに分かれているわけではなく、マルクの四力国のほうに開けられた四つの門があるので、城壁に沿い、円形に商店街が広がっている。言うな

れば商店街というよりは商店道か。そして中央のエリアを三分割してギルド街、魔法学院、居住区に分けられている。さらにその中心に、地下に広がる迷宮があると言った感じだ。

今から行くギルド街は、その名の通りギルドのためのエリアで、現在は三十以上のギルドがあり、それぞれ下は十人前後から、多いギルドでは数百人規模で成り立っている。熟練の冒険者もいるが、周囲の森やダンジョン、地下迷宮には、トロール等のランク持ちの魔獣はそこまで存在しないので、初心者の冒険者も多数存在している、そのために冒険者間では、冒険者の集う町と呼ばれているのだ。

(……しかし、トロールが群れて現れるなど本当にあるのか?)

だからこそ、アイリスはいなほから聞いたことに疑問を感じずにはいられなかった。一番下のHランクとはいえ、トロールは単体でランクを付けられるほどの凶悪な魔獣だ。それに、基本群れても二、三体程度で、ゴブリンやオークを配下に行っているのが普通である。

この豪快な男であるいなほと、純朴で優しい少女のアイリスが嘘をついてるとは思いたくないが、常識的にはあまり考えられない。

まずはギルドにそういつた依頼が来てないか確認すべきだろう。等と考えながら歩いていけば、三人は商店街を抜けてギルド街に来ていた。

商店街と違い、武装した人間ばかりがいる。大通りに並び立つ建物は、全てがギルドによって使われているものだ。周りを無数のダンジョンや魔獣の出る森に囲まれているため、多数の依頼が来るマルクでは、大小様々なギルドが並んでいる。大手のギルドは幾つもの建物を使用しているところもある。賑わいは商店街程ではないが盛況で活気がある。彼らは全員が冒険者なのだろう。中には結構強そうな奴もいて、いなほの嗅覚を刺激した。何処となくかつての不良の溜まり場に近い雰囲気を感じるが、あそこと違ってここは穏やかだ。きつと戦闘者の持つ気負いがいなほにかつての居場所を彷彿

とさせたのだろう。

まあエリスはといえば、普段は商店街までしか行かないので、初めて来たギルド街に興味津津といった様子である。もう慣れたのか、肩車されているという彼女を見てくる人の視線も気にしてはいない。

「ふわぁ……いなほさん、凄いですねえ」

「ああ、さっきのともよかったが、ここも中々気に入ったぜ」

「気に入ってくれたのなら幸いだ。さて、行くのは私の所属するギルドになるが、それは構わないかい？」

アイリスがそう尋ねると、いなほとエリスは同時に頷き了承した。「そうか」と言うと、アイリスが先頭に立ち歩きだす。そして少し大通りを歩くと、アイリスはギルド街に並ぶ木製の建物の一つの前で止まった。

「ここが私の所属ギルド。『火蜥蜴の爪先』だ」

建物の入り口の上部分には、サラマンダーと呼ばれる魔獣のイラストと、ギルド名が書かれた看板が立てかけられている。生憎と言葉はわかってても字が読めないいなほに名前の理解はできなかったが、センスのいい看板だなとは思った。

「では、入ろう。ようこそ御客人」

第十話【ヤンキー街に着く】（後書き）

次回、不器用ヤンキー

第十一話【ヤンキーやけ酒】

アイリスが気付いた風に一礼すると、ゆっくりとドアを開いて入るように促した。

ギルド、火蜥蜴の爪先の建物の中は、ちょっとした酒場のような感じだった。全てが木製の壁やカウンターにテーブルと椅子、ここでは珍しくもないのだろうが、いなほとしては新鮮な感じだ。いなほ達が入ったことで入り口の鈴がなり、珍妙な客を見て飲食等をしていたギルド員達が興味深そうに彼らを見た。

慣れたとはいえ、狭い室内で幾人もの屈強な人に見られるのは恥ずかしいのか、アイリスは四方に目線を泳がせる。一方いなほはこういう雰囲気慣れていいのか、堂々とした態度で進むと、適当に空いているテーブルの椅子に腰かけた。

ついでに肩車したアイリスを下ろして隣の席に座らせる。アイリスはといえば、カウンターで老いを感じさせながらも屈強な老人と話していた。

「……」

「どうしたアイリス？」

待っている間手持無沙汰のいなほは、何処か緊張した様子のエリスに声をかけて、無理もないかと頭を振った。

「皆、来てるんですかね……」

エリスの不安にどう答えればいいかわからず、いなほは虚空を仰いだ。店内を照らすランプの火を目で追う。

大丈夫と楽観的に言うこともできた。だがいなほは下手な希望を与えるのは逆効果であるだろうと思っただため、エリスの望む言葉を言うことができなかった。

多分、全員死んだだろう。いなほは可能な限りトロールを殺したが、森のほうまで人を追ったトロールがまさか自分の所に全員集中したとは考えづらい。村人もばらばらに逃げただろうし、トロールもばらばらに追っただろう。そして襲撃があっただのはいなほがこの世界にくるより前の話で、村の惨状を見る限り襲撃から随分経過した後のはずだ。

あえてあの日、トロール殲滅後、周りを探索するという選択をいなほは取らなかった。もし他の死体を見て、エリスにそれを隠し通せるとは思えなかったからだ。

「待たせたな」

痛い沈黙の空気を裂くように、アイリスが席に座った。エリスがすぐるような眼差しでアイリスを見る。

アイリスは、ただ申し訳なさそうに目を伏せた。

「君の村からの依頼所への依頼はなかった。事が事なら緊急を要する事態だ、ここまで逃げのびたなら、即座に報告していただろう。つまり、残念なことだが……」

「……そう、ですか」

エリスはどうか口を笑みの形にしつつ、顔を伏せ、肩を震わせる。

声を漏らさずエリスは泣いていた。唯一の希望は容易く奪われ、冷たい井戸の底に落とされたような絶望感が彼女を包む。

「……エリス、二階にプライベートルームがある。防音もしてあるから、そこに行こう」

アイリスは、静かに泣くエリスの肩を掴むとそつと立ち上がらせた。言われるがまま、促されるまま、エリスはアイリスに引かれて二階へと上っていく。いなほは追わなかった。いや、追えなかった。

「ケツ、ザマあねえ」

鼻を鳴らして自嘲する。自分は、全く持って無力だ。現実を叩きつけられていなほは無性に悲しくなり、酒が欲しくなった。

すぐにアイリスが二階から下りてくる。そしてカウンターの老人に一言話すと、黄金に透き通った色の飲み物の入ったグラスを二つ持っていないほの対面に腰かけた。

「エリスには暫く一人にしてくれということ、そのままにしておいた」

グラスの一つをいなほの手前に置く。グラスを手に持ち、仄かに香るアルコールの匂いを感じて、躊躇いなく一気に口に流し込んだ。強めのアルコールが喉を焼く。通った個所がわかるくらいに酒の通った場所が熱を帯びた。胃にまでたどり着いた酒がわかる。だが熱い体と裏腹に、心は未だ冷めきつたままだ。

「随分いける口じゃないか。というか、乾杯もなしなのはいただけないな」

「そういう気分でもないし、これはそういう酒じゃないだろ」

「そうだな。これはやけ酒だよ」

アイリスも一息でグラスの中を空にする。そして老人に「ボトル一つ。丸ごといただく」と言った。

無言で先程の黄金がなみなみと入ったままのボトルを老人がテーブルまで持つてくる。いなほはボトルを掴むと、アイリスのほうに注ぎ、続いて自分のに注いだ。

「エリスみたいな人は、こんな稼業だ、たまに出くわすよ。そんな無力に泣く彼らを見る度、知らない他人は救えなくても、せめて自分の周りでは、この町にいる者にはそんなことが起きないようにと、鍛錬に励んだ」

口を付けて、アイリスはグラスを弄んだ。ほのかに赤い頬とグラスを見ているようで、遠くを見ている眼差しは、どこか扇情的だ。

「だが、どうしてかな。ついさっきまで私の周りの存在ではなかったエリスの涙が、こんなにも苦しい。その他大勢を助けることが出来ないのはわかっていて、割り切ろうとしたのに……いいような無力感に自分が情けなく思えてしまうよ」

アイリスの無力感は、いなほとは少し違うかもしれない。だが、その気持ちだけは共感できた。いなほは再び酒を一気に飲み干す。冷たい心を少しでも熱くする熱が今は欲しかった。

「ところでいなほ。君は……何であの場所に居たんだ？」

互いにグラスを再び空けると、新たに杯を自分と相手の分を注ぎながら、アイリスがいなほに尋ねた。

質問の意図がわからないといなほは目を細くして、無言で続きを促す。先程とは違い、彼を警戒しているかのようにアイリスの声は

固い。

「トロールは本来、数十体の群れになることはほとんどありえない。何せ奴ら自身が群れの中心となる存在だからだ。多くて三体程度、配下はゴブリンやオークといったランク無しの魔獣なのがほとんどだ。さていなほ、ここで不思議なのは、君達の話が本当だとしたら、あり得ない程の群れで行動するトロール達が襲撃した村の傍に、『偶然』君がいたということだ」

「そりやつまり……」

「重なり合った偶然は必然とも言つ。さて、もう一度聞こうかいなほ。何である場所に君は居たんだ？」

氷のように冷たいアイリスの視線がいなほに突き刺さつた。肌が沸きたつような感覚とは別に、否応なしに燃え上がる闘争心。

いなほは再び杯を一飲みした。吐きだす息はアルコールの匂いを放つ。あるいはそれは、内の熱気なのかもしれない。

「気付いたら村の近くの森に居た。陰気臭え野郎に飛ばされてあそこに来たんだ……止めようぜアイリス。俺はそういう面倒臭いのが大っ嫌いなんだ」

常人なら思わず目を逸らしてしまうようなアイリスのプレッシャーを真正面から受け止めていなほは答えた。

偽りを感じない強い眼。アイリスは観念したようにため息を吐きだした。

「……ハア。まあ君が裏で何か企んでるような人ではないのはわかってるからな。すまない、試すような真似をしたね」

「気いすんな。そういうのは嫌いじゃねえよ」

体を弛緩させ、苦笑する。試されるような立ち位置にいるということぐらいいなほだってわかってはいる。

アイリスもいなほの理解を得られて安堵していた。正直必要な行動だったが、一瞬漏れた殺気は、間違いなく自分を狙っていた。冷たくなったのは自分のほうだ。アイリスは冷えた肝を温め直すために酒を飲んだ。

「とりあえず村のことについては、私が個人的に調べに行こう。正直、トロールの大量発生で村が滅んだなどという話を信じてくれる者などいないだろうからな」

「テメエは信じたじゃねえか」

「私はどうにも人を信じやすいタチでね」

「さつきは俺を疑ったろ？」

「君はまず、信用されたいなら見た目をどうにかしたほうがいい」

「俺の顔は悪党以外に見えはしねえからな」

いなほの自虐がツボにハマったのか、二人は同時に笑った。

「自覚があるとは思わなかったよ」

「これでも根っからヤンキーだからな」

「ヤンキー？」

「喧嘩しか能のねえ糞ったれのことさ」

「でも、君は彼女を助けた」

「あんなのはただの気まぐれにすぎねえ」

「それで、気まぐれが終わった今、君はこれからどうするんだい？」

会話が途絶えた。エリスを安全圏に届けたことで、もうこれ以上いなほが関わる必要はない。トロールの件もアイリスがどうにかするだろう。

ならばいなほがこれ以上エリスに関わる必要はない。冷たい話かもしれないが、エリスは所詮、どこにでもいる村娘なのだ。エリスとこれからも一緒に居ても、メリットはない。

「エリスはいい女だ」

いなほはアイリスの質問に答えずに、そんなことを口走った。

「あんな小さいなりの癖に、親やダチがいねえのによく踏ん張ったよ。だから俺は……」

一度言葉を止めてグラスの底を覗く。黄金の液体の表層は光を反射し、僅かに揺れた。いなほの心もまた、あの少女が見せてくれた強さに揺れ、何もしてやれない無力を恥じた。

「目的がねえんだ。だったら折角知り合えた奴とわざわざ別れる必要もないだろ？ それに、知り合いは大切にするほうでな」

俺は、の後に続く言葉は呑み込み、腹の底に沈める。いなほはわざと明るい素振りで言った。

「だったら、さっさと行ってやれ」

アイリスがエリスのいる二階のほうを見る。

「大切にするんだろ？　だったら早く泣きやませるんだな。私は吐いた言葉を撤回するような奴は嫌いだね」

「言ってるアホが」

いなほは席を立つと、その足で二階へと向かう。

「全く、普通は泣いた時点で慰めるのが男の甲斐性だろうに」

グラスを傾けるアイリスは、まるで女心をわかっているいなほを思っ、なんととも言えないため息を漏らすのだった。

第十一話【ヤンキーやけ酒】（後書き）

次回、ヤンキーと約束

第十二話【ヤンキーの約束】

わかってはいた。自分が生き残ったのはただの奇跡でしかなく、トロールの群れという絶望的な状況で生き残れる人などいないのだと。もしかしたらいなほが早すぎて先に着いてしまっただけかもしれない。と思えるほどエリスは楽観を貫ける心境ではなかった。

僅かな希望を砕かれ、エリスは一人案内された部屋の隅っこに蹲り泣く。ずっと一緒にいた皆がいない。悲しくて辛くて、全部がもうどうでもよくなった。

「……何、で、私だけ、生き残ったの、かな」

痙攣する喉で絞り出した声は、自分だけ残ったことに対する怨嗟だ。こんなに辛くて苦しいなら、自分はその時助からなければよかった。

「どうして、私だけ……！」

膝に顔を埋めて涙で服を濡らす。このまま何もかも投げ出して、絶望に身を任せたかった。

全部嫌だ。全てが嫌だ。自由落下に似た浮遊感を味わいながら、膝に埋まる瞳は次第に感情の火を失っていき、最早何も映さなくなるうとして、

でも、私はそれでも生かされた。

「……」

その最後の最後で、エリスの瞳は生気を手放さなかった。

わかっている。わかっている。自分が生きたのが奇跡なら、自分がこのまま絶望に沈むのは、親や友人を含めた人々の中から奇跡の対象に選ばれたことを冒瀆する行為だ。あの状況で、母親が逃がしてくれた。父親が生かしてくれた。友人たちが代わりに生贄となった。

犠牲の上に立つ命。ならばエリスは、生き残った事実を受け入れなければならぬ。

普通なら誰でも、絶望に沈むのは無理もないというだろう。普通なら誰でも絶望に染まるだろう。でもエリスは、いなほが思った通り強い心を持っていた。希望を砕かれても踏みとどまる強さを『持つてしまった』。

弱い少女の体にはあまりにもこの奇跡は重い。今はぎりぎりですどまることしかできなくて、ふとした拍子に忽ち崩れてしまうだろう。そしてこのまま一人で生きていくなら、明日にでもエリスは現実に潰されてしまうのは見て取れた。

そう、少女一人なら無理だろう。だが少女には、支えてくれる屈強が傍にいる。

「邪魔するぜ」

ノックもせずに入りこむのは、無礼を無礼とも思わぬ男、早森いなほだ。いなほは、隅っこからこちらを見上げる涙を流すエリスを見つめ、困ったように頭を掻いた。

「……こういう時、俺はなんて言ったらいいのかわからねえ」

一言一言、言葉を選びながらいなほは語る。何も考えずにここまで来たために、エリスに会って何を話そうかなどまるで考えていなかったのだ。視線を辺りにさ迷わせ、それでもそんなのは男らしく

ないとエリスに目線を戻し、やはり何を言うべきか分からなくなつて目線をずらす。

己が無敵だと豪語しかねない男も、過酷な状況に叩きこまれた少女を励ますのは難しい。これまで行ってきたどんな喧嘩よりも苦しげに唸り、悩み、窮地に立たされている姿は、いなほという男を知る者がここにいたら驚きを隠せないだろう。

現にエリスだっていなほの慌てている姿を見て、涙を流すことすら忘れてその姿を見上げていた。

「だからよ。その、あれだ。ケツは持つてやる……っての？ あー、つまりだな」

不器用ながらも、いなほが自分を励まそうとしているのがわかつて、エリスは目をまん丸に見開き、しどろもどろとあーでもないこーでもないといういなほが次第に可笑しく感じて、小さく笑い声を漏らした。

だが焦るいなほはそんなエリスの様子にも気付かず、励ましにもならない意味不明な単語を言い続ける。それが可笑しくて可笑しくて、エリスはとうとう我慢できずに声を張り上げ笑い出した。

「も、もう！ いなほさんは！ いなほさんってば！」

「お？ おお？ 何だ、楽しいのか？」

笑い声が止まらない。同時に涙がさつきよりもっと流れた。

泣き笑いするエリスに、やっぱりしいなほはどうしてかいいかわからず右往左往する。トロールを容易く葬る鋼の男が、今は少女一人に振り回されてこの様だ。

「ね、ねえ、いなほさん」

「おう。何だ？」

「どうして、私を助けてくれたんですか？」

唐突に、エリスはそんなことをいなほに聞いた。何故自分なのか、そんなこと、ただの偶然以外あり得ないのに、でもエリスは聞かすにはいられなかった。

いなほは笑うのを止め、今にも何処かに飛んで行ってしまいそうなほど儂げな表情のエリスに何かを感じたのか。手拍子に応えず、一呼吸置くと言った。

「助けてえから助けた。だからなエリス」

隅に座ったままのエリスの前まで行き、いなほはしゃがむと、恐る恐るその手をエリスの頭の上に乗せた。

「心に刻んだこいつを、俺は必ず押し通す。エリス、テメエを助ける。改めて俺のここに刻むぜ」

トントンといなほは自身の胸を叩いた。心に刻む、エリスを助けるという誓い。

理由は充分だ。エリスは頭を撫でる無骨な掌の感触に身を委ね、気持ち良さそうに目を閉じる。

「いなほさん」

「あつ？」

「助けて』くれていて』ありがとうございます」

今も自分を助けていることに感謝する。眼を閉じているためエリ
スは感謝を告げられたいなほの表情を確認することはできないが、

「……言つたる。痒いんだよ、そついうの」

きつと優しく微笑んでいるに違いない。

第十二話【ヤンキーの約束】（後書き）

次回、ヤンキー、危険生物認定を受ける

第十三話【ヤンキーとギルドと水晶玉】（前書き）

感想など、応援していただきありがとうございます。

第十三話【ヤンキーとギルドと水晶玉】

翌日、とりあえずはそのまま部屋を借りて夜を過ごしたいなほどエリスの元をアイリスが訪ねてきた。

「失礼するよ」

ノックをして、エリスの声を聞いてから入室してきたアイリスは、先日の鎧をまもつてはおらず、シャツとズボンのみのラフな格好だ。そのため、白磁のような綺麗な色をした細い手足。服を持ち上げる豊かで動けば弾む大きな胸。その胸をひと際強調する高価な調度品の描くラインのごとくくびれた腰。そしてキュツと引きしまったお尻など、男性の欲情を促すような刺激的な肢体がはっきりと見て取れた。

現に彼女がここに来る道中の最中にも、何人者男がその姿に振り向いたりしたほどだ。だがいなほはそんな彼女の扇情的、ぶっちゃけエロい体をじろじろ見るようなことはせず、本当に気にした素振りもなく手を上げて挨拶した。

「よう。何だ、今日は鎧とか剣は付けてねえのかよ」

「町中でも付けてたら体が固まってしまふよ。ただでさえ最近は胸が重くて肩が凝って困っているしな」

「んなのぶらさげてるなんざ女は大変だねえ」

「ホント面倒だよ。周りからはいやらしい目で見られるしね」

困った困ったため息。いなほは「ふーん」と本当にどうでもよさそうに空返事するが、アイリスに比べ女性的な魅力にやや劣らざるを得ないアイリスとしては、アイリスのその発言が許せないのか不満げに口を尖らせている。

「で？ テメエの乳の話をしに来たわけじゃねえんだろ？」

「私にも少モガツ……！」

何か叫ぼうとするアイリスの口をいなほは押さえつつ言う。

「そうだ。とりあえず君達の今後の身の振り方について相談しようと思っただね。いなほ、アイリス、私達のギルドに入る気はないか？」

「ギルドってえと……何だ？」

知らないと言を傾げるいなほ。アイリスは説明をしようと口を開いてから、釘をさすようにいなほを睨んだ。

「話は、ちゃんと、聞くんぞぞ？」

「大丈夫だつての」

「それが信用ならないのだが……要するに様々な人からくる依頼を受け持ち、解決していくところだ」

「つまり何でも屋ってことか？」

「認識としては正しい。主にちよつとした雑用から、護衛、探索、そして討伐。多種多様な問題を解決して見合つた報酬を貰う。いなほ、あの森で見せた君の身体能力なら、こちら一帯の討伐や護衛依頼は簡単にこなせるはずだ。ここに来て日が浅いならなおのこと、色んなことを知ることができる」

「そうか。じゃあギルドに入るわ」

いなほは一瞬も考えずに即答した。さらに口を押さえたままのエリスも指差し、「勿論こいつもオツケーだからな」と返事もしていないのに無理矢理決めつける。「むー！」と何かを訴えるエリスだがいなほはシカトした。

あまりにも呆気なくギルド入りを認めたいなほに対してアイリスは驚きを隠せない。

「君のことだから、てつきり組織なんざに入る気はねえとか言うかと思つたが」

「そこまでツつぱつちゃいねえよ。俺は冷静さを一番の武器にしてるんだ。で？俺は何からしたらいい？」

エリスの口から手を放し立ち上がる。「勝手に決めないで下さいよ！」エリスが小さな体を目一杯広げて怒りを露わにする。

「あ？入りたくなかつたのかよエリス」

「いや、私はその、危ないことをしないんだつたら……」

「おいアイリス。エリスは大丈夫だよな？」

「勿論。彼女には主にここの受付をしてもらう予定だったが」

「なら決定だ。文句ねえなエリス」

納得はいかないが、実際問題ないなら仕方ない。エリスは渋々了承の意を伝えた。

「うし、アイリス、どうするんだ？」

改めていなほが尋ねてきた。

「そうだな。まずはギルドに登録手続きを行ってから、ついでにランク認定もしておこう」

「ランク認定？」

また知らない単語だ。アイリスはそんなことも知らないのかと笑ってから再び説明を始めた。

「ランクとは、極端な話、その生物の危険度を表している。A+からH-までのランクがあるが、一番低いHランクでも、一般人にとってはかなりの危険度だ」

ランクは魔獣も含めた全ての種族に適応されている。魔獣ならば単純な危険度を示し、知恵のある人やその他の種族においては、生物としての危険度のほかに、その者がどの程度優秀なのかという意味合いも含まれている。幾人もの武装したランク無しの兵士を容易く殺すトロールでようやくHランクであることから、ランク持ちはそれだけで畏怖と尊敬の対象となるのだ。

ちなみに最上位のAランクは、伝説上の魔神や魔王、世界を救っ

た勇者や破壊の限りを尽くした最強のドラゴンとかの、神話級の実力がなければ至ることができない。精々、才能に満ち溢れた者が死ぬ気で努力してようやくDランクになるかどうかと言ったほどだ。

「だから我々冒険者は、ランク認定を受けるほどの実力を得られるように、日夜鍛錬に励んでいるのだ」

「なるほど。通りで強そうな感じがしたわけだぜテメエは」

闘志を湧き立たせるいなほにアイリスの本能が危険を訴える。Fランクになって、周りから畏敬の念を送られるようになったアイリスを持ってして、敗北を予感せざるをえない威圧感。

「ギルドに登録すれば私なんかより楽しい敵と戦えるさ」

果たしてこの男のランクは一体どれほどのものなのか。恐れが積もる一方、興味が尽きないアイリスは、二人を先導して一階に降りるのだった。

朝方だというのに、一階の酒場件依頼の受付を兼ねた集会所には、ちらほらと火蜥蜴の爪先のメンバーがそれぞれ慣れ親しんだメンバーごとに集まって、テーブルの席に腰かけていた。

そしてカウンターでは、グラスを磨く昨日と同じ老人が立っていた。アイリスはカウンターに近づくと老人に声を掛けた。

「ゴドー爺。先日話した者達だ」

「む……あんたらがアイリスの連れてきた奴か」

老人とはいえ、服の下の逞しい腕や、未だ衰えを見せない鋭い眼光は熟練の強さを発していた。二人を見るその眼差しに、エリスが

怖がっているなほの背中に隠れた。

「爺。そんな態度だから雇う受付嬢がどんどん辞めてくのぞ」

「むう……」

ゴドーはアイリスの言葉に心なしか落ち込んだように肩を落とした。彼自身には別段誰か怖がらせるつもりはないのだが、持って生まれた顔ばかりはどうしようもない。

何となく怖い顔同士シンパシーを感じたのか、いなほはカウンタ―越しにゴドーの肩を叩いた。わかるぜその気持ち。怖面同盟ここに結成。という程ではないが、二人に不思議な絆が生まれた。

「それより、早速いなほにはギルド登録を済ませてもらう」

「どうすんだ？」

いなほの質問に答えず、アイリスはゴドーに目配せした。わかつたとばかりに頷いたゴドーがカウンターの下に潜ると、黒い箱を持つて立ちあがった。

ゴドーが黒い箱を開けた。中に入っていた炎をそのまま詰め込んだかのように赤い揺らめきを内包した、親指大のクリスタルが付いたペンダントと、墨汁に漬けたかのように真黒な小さい水晶玉をアイリスはゴドーから受け取る。

「これが私達のギルドの証だ。ランクギルドの証明である赤色、これを見せれば大抵の場所や国家間移動もできる。要は通行証だな」

そう言ってアイリスは、首に掛けていた同じ形のペンダントを取り出すと、クリスタル同士を合わせた。

「いなほ、クリスタルに触れてくれないか？」

「おう」

いなほが合わせたクリスタルに指を添えると、アイリスは目を閉じてその魔力を介抱した。

「『契りの証よ。この者を新たなる同胞に迎え入れる』」

アイリスから溢れた青色の魔力がクリスタルに吸い込まれる。内包した炎は輝きをさらに増した。業火に震えるペンダント。だが揺らめきはすぐに収まった。見た目は何の変化もないペンダントをアイリスはいなほに渡す。

いなほは受け取るとともにすぐに首にペンダントをぶら下げた。

「火蜥蜴の証よ」

アイリスが言う。同時、彼女のペンダントが輝き、何もない虚空に赤い文字を浮かび上がらせた。

「覚えておいてくれよ？ 同じキーワードを言うことで、魔力を伴わずペンダントの前にギルドの名前が浮かび上がる。勿論さっきの契約をしたものがキーワードを言わない限り、ペンダントは起動しないので、なくしても悪用はされない。ただなくしたら銀貨一枚受け取るからな」

どうやら永続的に文字が浮かぶわけではなく、虚空の文字は十秒ほどで蜃気楼のようにあっという間に消えてしまった。

試してみると促すアイリス。いなほは柄にもなく緊張してるのか、

小さく呼吸を一つしてから、アイリスを見た。

「で、なんて言うんだ？」

「火蜥蜴の証よ、だ！」

「サンキュ……… 火蜥蜴の証よ！」

アイリスといなほ、二人のペンダントが光文字が浮かび出る。お
お、といなほは感嘆の声を漏らした。

「これでギルド登録するのは終わりか？」

買ったばっかの玩具で遊ぶ子どものようにペンダントを弄りなが
らいなほは言う。その隣でエリスが「ペンダントのお金………」と、
先程の銀貨一枚を聞いたためにか、不安げな表情をしているが、い
なほはそのことには全く気付いている様子はない。

勿論アイリスもただでペンダントを上げたわけではない。普通な
らペンダントに銀貨一枚、それ以外の諸々の手続きでさらにもう一
枚銀貨を貰うのだが、例外はどこにでもある。

「後一つある。これが終われば君も晴れて私達の仲間さ」

そう言ってアイリスは、箱に入っていた黒い水晶玉を取り出した。

「これに触れると、触れた対象のランクがどの程度なのかを確認す
ることができるんだ」

掲げた水晶玉は、みるみる内に色を失っていき、数秒すると青色
に変色を果たした。

「青色はFランク。私のは色も薄くも濃くもないのでただのFだ。Aなら黄金。Bなら銀。Cなら赤。Dなら橙色。Eなら緑色。Fなら青色。Gなら水色。Hなら茶色といった感じで、ランク外は黒から変色しないようになっていて。ここに+や-がつくのだが、これは色が濃ければ+、薄ければ-、どっちともつかないなら+-はつかないといった風だな」

「綺麗な色してんな」

「無視か。そうか」

説明など聞かず、青く光る水晶の美しさにいなほは目を奪われていた。怒る気にもなれず、アイリスは頭を振ると、箱に水晶を収めた。

再び闇のような黒に戻る水晶。

「さあ。持つんだ」

アイリスが箱をいなほに差し出すと、いなほは興味津津といった感じで水晶を手にとった。

アイリス、エリス、ゴドー、そしていなほが、彼の手に収まった水晶を見つめる。はたして水晶は、白くなったと思っただら、その中心が太陽のように眩いオレンジ色の光を放ち始めた。

「まさか、D+……!？」

「こいつはスゲエ……」

「凄い……いなほさん」

いなほを除いた三人が驚嘆に声を失う。いや、ギルド内に居た者が全員、その眩いオレンジの光を目にして言葉を失っていた。

Dランク、上から数えて三つ。いなほは納得いかねえと眉を顰めた。話を聞いていないようでちゃっかり聞いていたこの男は、自分なら金色になるだろうという根拠のない確信を持っていた。なので期待外れのオレンジの輝きには不満だ。

同時に歓喜する。極限まで鍛えた。周りには敵などいないと思っただ。だがもしこの光とランクが正しいのなら、いなほ以上の実力を持つ者がこの世界にはごろごろ存在するということになる。未だ出会ってはいない敵を思い描き、体を震わした。

「私も驚きだ。よもや君がここまでの逸材だったとは……」

いなほの震えを高いランクに驚いたことへの震えと勘違いしたアイリスがそんなことを言った。

いなほは答えずに、水晶を箱に戻した。たちまち輝きは黒い闇に飲み込まれ消失する。

「これで満足か？」

「おう。ギルドマスターには俺から伝えておく」

答えたのはアイリスではなくゴドーだった。その目には信じられない物を見たといった感情がありありと浮かんではいるが、そこはプロ、いなほのことを問いただしはせず、店の奥に引っ込んでいった。

「……ともあれよかったよ。大丈夫だとは思ったが、これで各種登録料は免除になる。Gランク以上はどのギルドでも重宝されるから

ね。一人で大抵の依頼を問題なくこなせるG - 以上の人材からはお金を取らないのがギルドのルールなんだ」

まだ興奮冷めやらないのか、目を輝かせるアイリスと、いなほの背中に隠れたままのエリス。いなほは何ともなしに尊敬の眼差しで自分を見上げるエリスの頭を撫でながら、アイリスの話聞いた。

思いのほかスムーズにいなほのギルドへの入会は成立した。エリスについては、今のところランク持ちではないのでペンダントを上げることはできないが、ゴドーのいかつい顔によって辞める者が続出した受付嬢の位置に落ち着くことになった。

そして、それから暫くして、いなほのギルド初仕事が行われることになる。

第十三話【ヤンキーとギルドと水晶玉】（後書き）

次回、ヤンキーの初仕事

ランクについては今後もっとわかりやすい形に修正しようと思います。

第十四話【ヤンキーのお仕事】

ランク持ちが強いとは言え、それだけが全てではない。黒水晶で確認できるランクは、あくまで表面的なもの、身体能力と魔力の合計値で算出されるため、そこには個人が積み上げてきた技術や経験や知識は反映されない。事実、ランク無しの人間がトロールを一对一で倒したという話もある。それに基本数年ギルドに入り様々な魔獣と戦ってきた冒険者や、鍛錬と国直々の魔獣討伐をこなした兵士等はHランク程度にまでは到達することができる。

だがそこまではあくまで常人の至れる平均的な到達点だ。Gランク以上の者は常人の域を超えた者、これらは総じて畏怖と畏敬の対象だ。

とはいえここら辺の線引きは種族間で大きく異なる。基本数は多いがそもそもがその好戦的気質以外、戦いには向かない人間は大体ランクを持たないのでランク持ちを恐怖する。

他にも武器等の何かを鍛えるのに特化したドワーフや、身体能力の代わりに魔力を失った獣人も大体人間と同じ考えだ。

一方で、エルフや竜人や鬼人、そして人間でも一部の貴族階級等はランク持ちが当たり前なので、この括りには当てはまらない。最も後者の彼らは個体数が圧倒的に少ないので、相対的に人間達等とランク持ちの数はそこまで変わらないのだが。

「つまり話をまとめると、人間で、しかも初めてランク認定を受けた者がD+ランクというのは、エルフ、竜人、鬼人、貴族階級の中でも珍しい話だということだ。聞けえ！」

アイリスの拳が欠伸するいなほ目がけて飛んだ。だが拳は軽く見

切られ空を切る。ちなみにエリスはギルドでせつせと仕事を頑張っている。

現在二人がいるのは、ギルド街の中心にある依頼幹旋所だ。近隣に無数のダンジョンと森があるここでは、採取、護衛、討伐、探索といったあらゆる依頼が毎日殺到している。それを一か所にまとめて、ギルドが個々で受注するという形で依頼はなっている。

とりあえず、あの登録の日から二日が経過した。この二日、エリスはゴドーから受付の仕事について学び、アイリスはそんなエリスの様子を逐一見に来るついでに、ギルドにトロールの群れについての調査を打診しながら、いなほに依頼を受けさせようとしていた。

だが肝心のいなほはと言えば、アイリスが探すにも関わらず、町のどっかにフラッと出掛けては、夕方近くに帰ってくるを繰り返していた。

そして今日、朝一で来たアイリスにととうと捕まっていたいなほは、依頼幹旋所に来て依頼を見ることになった。

だがまるでやる気のないいなほに代わり、アイリスが依頼の難易度を言いながらどれが良いか聞いてきたものの、いなほはあまりにも低い難易度の依頼に難癖をつけ、アイリスがいなほに君がどれだけ異常でこの依頼が普通であるかを説明するうんぬんで今に至る。

「しかし湿気た依頼ばっかだぜ。糞の足しにもなりやしねえんじやねえか？」

巨大な掲示板に狭しと張られた依頼は、ほとんどがHランク程度の依頼の上、あっても最大がH+程度だ。ともすればいなほのテンションは下がる一方である。ちなみにいなほが戦ったトロールの群れの討伐は、ランクに換算してF相当の討伐隊が組まれる程の危険な依頼だ。

「とは言ってもだな。少し前は魔獣の活発な時期でもっと難しい依

頼はあったが、現在はダンジョンや森からあぶれる魔獣などそうそう現れるわけでもない。いても村に駐在する兵士で事足りるだろう」

アイリスが最近受けた依頼はGクラスで、こちら辺ではかなり難しい依頼である。

だがそうはいはいGランククラスの依頼があるわけでもない。いなほはめんどくさそうに上の方に張り付けられていた紙をむしり取るとアイリスに手渡した。

「ほら」

「むっ、これは……ムガラツパ村までの護送依頼と、村の周りにいる魔獣の間引きか。Hランクだがいいのか？ しかも拘束期間は最長で一週間だぞ？」

「おう。結局金が必要なのは事実だしよ。いい加減テメエに奢ってもらうのも癪だしな」

「私としては貸しのつもりだったんだけどね」

「細かいとこ気いすんと禿げるぜ？」

「禿げないよ！」

いなほに向かって怒鳴り、頬を膨らませたまま受付の目の前に紙を叩きつける。テーブルを凹ませる勢いで置かれたときに響いた音に受付が「ひい」と情けない声を上げたが無視。

「え、と……この依頼は、お二方で？」

「ああ。火蜥蜴の証よ」

アイリスのペンダントが文字を放つ。いなほもアイリスに目線で促されペンダントの起動キーを口にした。

「火蜥蜴の爪先、二名様ですね。しかしミラアイス様がパーティーとは珍しい。そちらは、新人のかたですか？」

書類に何かを書きながら受付が物珍しげにいなほを見た。

「ん。まあね」

何処か居づらそうに頷くアイリス。同時に、受付が書類を書き終わり、それをアイリスに渡した。

「いずれにせよよかったです。規定人数は集まっていたのですが、H相当の依頼なので万全のために、ちょうどもう数人は欲しかったところだったんですよ。依頼主にはこちらから増員の方を伝えます。早速今日の正午に商店街の北東地区にある穴掘り亭で集合らしいので、この書類を持って行ってください」

「わかった。依頼完了はいつもの通りギルド経由で伝える」

「かしこまりました。お気をつけてくださいね」

受付が深々と頭を下げるのに見送られ、いなほとアイリスは幹旋所を出ていった。

と、朝の活動する時間帯、人ごみで騒がしい中を何かを探すように辺りを見渡すエリスがいた。

「あつ！」

その視線がいなほ達を見つけると、目を光らせて近寄ってくる。

「いなほさーん！」

エリスはいなほの名前を呼びながらその腕に抱きついた。手なれた様でいなほは勢いのままエリスを肩車する。まるで猫か何かだ。一連の動きを見ながらアイリスは思った。

「エリス。君、仕事はどうしたんだい？」

「休憩をいただきました。ここ数日は朝に人が沢山集まることはないので、町を見てきなさいってゴドーさんが」

「それで私達を探していたと」

「はい。ところで二人は何してたんですか？」

上から覗き込むエリスに、アイリスは手に持った書類を見せた。

「依頼だよ。君が乗っかってる奴がようやく働く気になったらしくてね」

「ありがたく思えよアイリス。まっ、足引っ張るんじゃねえぞ」

「君って奴は……！」

ピクピクと眉を揺らすアイリス。いなほはその様が可笑しかったのかゲラゲラと笑いだした。

「まあそりゃ冗談としてもよ。エリス、俺ら一週間位ここ空けることになった」

「え？ そんなに長い間いないんですか？」

途端、不安げに表情を曇らせるエリス。今、最も信頼を置けるいなほがいなくなるのは精神的にも辛いのだろう。先程、いなほ達を探していた姿からもそれは明白だ。

だがアイリスはエリスが一人で何かを考えるいい機会だと考えた。

「大丈夫。幸い、他にもメンバーは居る。そもそも私が付いて行くんだ、余程のことがないかぎり大丈夫だよ」

「デメエ。それじゃまるで俺がおんぶに抱っこじゃねえか」

「何を今更、この数日の宿と飯代、出したのは誰だい？」

「ケツ、胸はデケエ癖に器は小さい女だぜ」

「胸は余計だろ胸は！」

歩きながら二人は口論を続ける。その頭上でエリスはいなほの痛んだ髪を心なし強く握って顔を伏せた。

あの悲劇からまだ一週間も経過していない。夜な夜な見る悪夢はエリスを苛むし、その度いなほを起こしては頭を撫でられて寝付く日々。もしいなほがいなかったら気が狂っていたかもしれない。そのせいか、今はいなほが隣で寝ていてくれないと不安で寝れなくなってしまった。

これではいけないとわかっているても恐怖は離れない。それに何よ

り、いなほまでもが自分の元からいなくなってしまうのではないか
と思ってしまうのだ。

そんな彼女の不安を察してか、いなほはエリスの両足を軽く小突
いた。

ハツと起き上がる顔の下、不敵に笑うは無敵のヤンキー。

「任せろよエリス。何、帰ってきて金貰ったら俺の奢りで飯食わせ
てやんよ」

「当然私も奢ってもらえるのだろうな？」

「知るかボケ。テメエは勝手に隅っこいって飯でも食ってる」

「うん。私はそろそろ君を殺してもいいような気がする」

「おうおう。これだから女はウゼえのなんの。エリス、テメエはこ
んなデカ乳になるんじゃないやねえぞ」

「ハハハ、エリス。申し訳ないが彼の無事は諦めてくれ」

爽やかに笑いながら殺意を漲らせるアイリスと、そんなアイリス
を見て爆笑するいなほ。

「……でも、出来たら助けてあげてくださいね」

大丈夫だと、根拠がなくても信じられる。不安は残るが、それで
もエリスは出来る限りの笑顔を浮かべて見せたのだった。

第十四話【ヤンキーのお仕事】（後書き）

次回、新キャラ続々

第十五話【ヤンキーと不揃いな仲間達】

エリスの見送りを背中に、いなほとアイリスの二人は集合場所へと向かっていた。

アイリスの服装は、いつものラフな物ではなく、要所をカバーした軽装備の鎧と水色鮮やかにたなびくマント、腰には愛用している片手剣を携えて、如何にも騎士といった出で立ちである。

だが今回の依頼は、食料もあちら持ちなので余分な荷物は他にはない。護送する街道は、最近、季節外れの魔獣の氾濫があったものの、ランク持ちの魔獣は出ないミヒル街道だ。

途中鬱蒼とした林を向けるが、そこでも強くてトロールクラスの敵が一体でるかでないか。本来アイリスの実力なら、完全装備せずに護送できる程度である。勿論、村周りの魔獣の間引きもあるが、これについても問題はあまい。

「初依頼とはいえD+ランクの君なら何も持っていかななくても大丈夫ではあるが、本当にその服装でいいのか？」

アイリスの隣を歩きなほは、いつものタンクトップに短パン、そしてここに来てアイリスに譲ってもらった皮の靴という、防御能力皆無の服装だ。

幾らランクが高く、あの森で規格外の身体能力を見せつけられたとはいえ、物事には万全を期して当たるのがモットーのアイリス的
に言えば不安を感じずにはられない。

だがいなほは問題ないとばかりに頷くだけだ。アイリスはいつそ

君の態度次第ではギルドの信頼も落ちるかもしれないんだぞとも言
ってやりたかったが、この男に限ってギルドのことなど気にもしな
いだろうと諦めていた。

「……まあ君がそれで依頼をこなせるといふならいいが。くれぐれ
も足を引つ張つてくれるなよ？」

挑発的な一言をいなほは鼻で笑つて見せる。

「笑えるぜアイリス。とどのつまりは近づいてきた雑魚を蹴散らす
だけの仕事だろ？ そんなんで俺がしくじるはずねえ」

「君のその確固たる自信が何処から来るか知りたいものだよ」

「腹の底からだよ」

「私のお腹は今にも痛みだしそうだがね」

不安げにばやくアイリス。だがこの数日間、このゆるぎない己
自身への信頼こそが、いなほの強さの源なのだろうとも彼女は思っ
ていた。

傍から見れば自信過剰の命知らず。だが実際は本当にその自信に
見合つた能力があるのだから達が悪い。

「と、ここだな」

アイリスが立ち止まって見上げた建物の看板には、穴掘り亭の名
前が大きく刻まれていた。

アイリスが先に入り、いなほが続いて店のドアを潜る。鈴の音が
響き渡る店内。ドアが閉まると、外の喧騒が遠く、静かな雰囲気

流れていた。依頼書を片手に辺りを見渡す。のんびりと飲食を楽しむ人々の中、目的の集団を見つけた。

「君達が今回の依頼のメンバーでいいのかい？」

その声をかけた相手は、アイリスの持つ依頼書と同じものを持つ三人の男女だ。

一人はいなほと同じくらいの巨体と、暑苦しいまでに盛り上がった筋肉を鉄製の鎧で包んだ威つい顔の男。テーブルには分厚く長い刀身の両手剣が立てかけてある。見た通りのパワータイプなのだろう。いなほ的には好きなタイプのおっさんである。

もう一人の男は対照的に、ゆったりとしたローブを纏った顔が整った少年だ。幼さの残ったへらへらした顔つきで、これから遊びに行くかのような気軽い雰囲気を出している。アイリス的には嫌いなタイプのナンパ野郎である。

そして唯一の女性は、まだ発展途上の肢体に、赤のラインが入った黒い制服を着ている少女だ。ピンク色の派手な髪を腰まで伸ばし、瑠璃色の大きな瞳がいかついいなほの顔を見て潤んでいる。髪色に反して気弱な少女だが、その両手には、少女の雰囲気にはまるで似合わない全体に棘のようなものがついたごついガントレットを装着している。いなほとアイリス的にはどうでもいいタイプである。

少年と少女はその胸元に獅子をあしらったエンブレムを付けていた。「魔法学院の生徒だ」知らないだろういなほに小声で教えるアイリスだが、やっぱりしいなほは聞かず、こちらを観察する三つの視線にあえて飛び込むように一歩前に出た。

「おう、待たせたな。俺はいなほ、早森いなほ。んでこつちがアイリスだ」

三人の座るテーブル席の空いてる椅子に大股開きで座る。「まっ、

よろしく頼むぜ」と、明らかに馬鹿にした態度で、思ってもいないことをいなほは言った。

その無礼な態度に一層ビビる少女、寡黙を崩さぬ男、そして少年はいなほの態度にイラついた。

「全く、どんな奴が来るかと思えばなんだよその態度。てか何その格好？ あんた依頼を舐めてるわけ？ おっさん、悪いこと言わないから帰りな。調子乗ってる痛い目見るよ？」

少年が盛大に毒を吐く。一瞬、誰にも気付かない程度の殺気をいなしは発したが、どうにかガキの戯言ということでないほは殺気を押さえつけた。

「あつ、勿論アイリスさんは残ってください。噂はかねがね、氷結の騎士と言えば魔法学院の元生徒会長としても、この町では期待の冒険者として有名な冒険者としても、どちらの意味でも噂になっています。氷結の騎士は氷の冷たさと花の美しさを併せ持つってね。ああ失礼、自己紹介がまだでした。俺の名前はキース・アズウエルド。魔法学院入学して一年ですが、ランクはH+なんで、そのこのヘンテコな格好の奴より遥かに役に立ちますよ」

とも思えば一転。いなほに向けていた嫌悪の表情を爽やかな笑顔に変えて、いなほを無視してアイリスに近寄ると、その手を取って握手した。

「ああ、よろしく頼む」

アイリスは手を握られながら無表情で事務的に返事をした。

まるつきり相手にされていないことに気づいていないのか、キースは笑みを深くして手を放すと、芝居臭く一礼して席についた。

「わ、私は、ネムネ・スラップといますデス。アズウェルドくんと一緒に入学一年デス。え、えと、ランクは……無し、デス」

後半は尻つぼみになりながら、顔を赤らめネムネは自己紹介を終える。

「ガント。H - だ」

巨漢の男、ガントの自己紹介は簡潔だ。隣のキースが自分よりも低いランクの二人を見て笑う。どうやら自分よりも弱い奴には徹底して強気らしい。

「先程紹介を受けたが、私はアイリス・ミラアイス、Fランクだ」

全員の自己紹介が終わったところで、改めてアイリスが言う。やはりというか、アイリスの名前は有名であり、全員の表情が変わる。変わらないのはいなほ位だ。

「それで、依頼主のほうだが……」

「おお、皆様ようこそ集まっていたいただき誠に感謝いたします」

腰の低い態度で現れたのは、丸々と太ったひげ面の男だ。着る服もゆったりとしていて貴金属類も付けており、如何にも成金といった形である。

「私、ルドルフ・ビツヒマンと申します。本日より一週間、皆様には護衛の方を何とぞよろしくお願いいたします」

男、ルドルフはそう言いながらぺこぺこ何度も頭を下げた。柔らかな面持ちと腰の低い態度に学生の二人は気を良くして握手までするが、他の三人は別段思うところもないのか、いなほを除いて軽く会釈するだけにとどまった。

「しかしほぼ全員がランク持ちの上、今巷で噂の氷結の騎士までご同伴願えるとは、いやはや、これは報酬のほうを上乗せせねばなりませんな」

「いやビツヒマン殿、そこまで買いつけてもらっても困ります。私も未だ修行中の身、過分な期待は気苦労となり剣を惑わせます。ですが、道中の安全だけは私の剣とギルドの誇りに誓いましょう」

「ほぼ、謙虚だと思えば随分と頼もしい。噂に違わぬ騎士ぶりですね。では改めてよろしくお願いいたしますよ皆さん」

再び全員を見渡してからルドルフは一礼する。

なんとも珍妙な組み合わせではあるが、こうしていなほの初依頼が始まるのであった。

第十五話【ヤンキーと不揃いな仲間達】（後書き）

次回、ヤンキー流火消し術（物理）

第十六話【ヤンキーの価値観は？】

いなほ達がこれから向かうムガラツパ村は、四方国同盟の一つである、メレクル王国側にあるそこそこに栄えた村だ。

土地が痩せているため田畑を耕すのには向いてはいないが、近くに豊富な鉱物資源に溢れた鉱山があり、そこで取れた鉱石を取引材料にして、金銭の調達を行っている。

ルドルフは、この村との契約を結んでおり、今回は定期交渉のためムガラツパに向かうということであった。

なので六つもの馬車があるものの、そのほとんどは空きであり、移動中の食料と交渉に使う金銭、そして野営用の物品以外には積まれているので、いなほ達は道中馬車を二つ貸してもらい、一方には男組で、一方には女性組に分かれて乗り込んでいた。

「……しかし暇だねえ」

昼下がりの道中、揺れる馬車の中で欠伸をしながら退屈そうにしているのはキースだ。馬車の中で寝ころぶ姿にはやはり緊張感はない。いなほはそんなキースを一瞥するだけにして、真正面に座る、両手剣を抱きながら片膝を立てて目を閉じているガントの方を見た。

「ようおっさん。いいモン持ってるじゃねえか」

「……お前には、必要ないだろう」

ゆっくりと目を開けてガントはいなほの拳を見た。彼もまたアイリスと同じくいなほの力量を見極めていたようで、その眼光には珍

妙な格好をしているいなほを侮るような色はない。

いなほは嬉しそうに喉を鳴らした。トロールよりも低いH・らしいが、間違いなくこの男はトロールなどよりも強い。確か経験や知識はランクに反映されるわけではなかったなと、いなほはアイリスの言葉を思い出していた。

その点こいつは駄目だな。

いなほは本当に昼寝を始めたキースを横目にしてつまらなそうに肩を竦めた。能力的にはガントを超えるキースだが、如何せんその能力を最大限に使えているようには見えなかった。この感じだとトロールとタイマンを張るのが精いっぱいだろう。

「それよか悪いなおっさん。俺は実はギルドに入ったばかりのウブだよ。ここらの流儀がわからねえんで迷惑かけるぜ」

「そうか……なら先輩として教えよう。走行を邪魔する魔獣を片っ端から殺せ。それでいい」

「流石先輩。適切なアドバイスが泣けるぜ」

いなほは豪快に、ガントは静かに笑った。世界は違えど、荒くれ者の感性は変わらないらしい。互いに共感する部分があるのだろう。酒があつたらここで一杯やりたいところだといなほは思った。

「だがお前程の気配を持つ者がこれまでギルドに入っていないなかったというのは奇妙な話だ。以前は何を？」

「変わらねえよ。ぶん殴るのが仕事みたいなもんさ」

片手を掲げていなほは気軽に応える。

「そうか。俺も同じだ。昔からこいつしか知らん」

ガントも両手剣を持ち上げて応じた。刀身を鞘から出していなほに見せる。

よく磨かれているが、よく見ると至る所に小さな傷が刻まれている。そのどれもがガントがこの両手剣と共に歩んできた誇りの証だ。

「やっぱりいいモンだよこいつは」

いなほは感嘆しながら、無数の傷が残る両手剣の美しさに見入った。芸術品のような美ではない。売ればそこまで高く売れるような一品ではないだろう。だが、繰り返ししてきた年月の育んだ戦いの歴史は、いなほにとってどんな調度品よりも勝る価値がある。

だからこの男はきつと強い。いなほがその拳に無数の傷を刻んだように、ガントもまた剣に己を刻んできた。きつとこの男と喧嘩したら素晴らしいものになるに違いない。

ガントもいなほの内心を感じたのか、小さくも深い笑みを浮かべた。わかっている。どちらも糞つたれの馬鹿野郎だ。

「うわー、おっさん達何笑いあつてんのさ。気持ち悪」

だがそんな楽しい空気をぶち壊す、間延びした軟派な声。

起き上がったキースが侮蔑をふんだんに含んだ眼差しで二人を見下していた。

「……」

「……」

ガントはおろか、いなほすらも反応しない。侮蔑の態度はいなほ

にとって苛立ちの対象だが、『子どもの駄々に』キレルほど器量がないわけではない（だがエリスにキレたことを本人はすっかり忘れてる）。むしろアホらしいと憐れむような眼差しをいなほはキースに向けた。

「あつ？ 何さその目。その態度気にいらなただけど」

食いかかるようなキースの態度。

うぜえ奴だ。我慢をしようにも限界はある。いなほはガキに怒鳴るのも大人げないので、溢れそうな殺気をため息とともに吐き出した。

「気に入らないならさっさと失せな。テメエが近付くとテメエのママのおっぱいの臭いがそのしょうもない口から臭ってきてやる気がなくなっちまうんだよ」

とは言っても出る言葉は呼吸するがごとく罵詈雑言。いなほ的にはとても優しく言っただけだが、あんまりすぎる挑発の言葉に、キースの顔が一瞬で赤に染まった。

「俺を舐めてるのアンタ……？」

「ケケケ、舐めさせたいならもつと美味そうになってから出直しな。乳臭えガキを舐める程モノ好きじゃねえんだよ俺あ」

「っ！」

狭い場所で立ち上がり憤りをまき散らすキースは、怒りのままにロープの下に手を入れると、先端に赤い宝石のようなものが付けられた木の杖を取りだした。

その先をいなほに向ける。ガントが静かに射線上から離れ、両手

剣を持つ手に力を込める。仮にも相手はH＋ランク、油断のない動きはプロらしい洗練されたものだ。

「へっ、どうしたよキースちゃん。腕がふるふる震えてるぜ？」

だがいなほはあえて逃げ出さずに、むしろ進んで杖の目に体を差し出すように前に出た。

赤い宝石にいなほの厚い胸板がぶつかると、一触即発の危険な空気、何かのきっかけがあれば即座に死地へと変わるだろうと緊迫。

その時、突如馬車が動きを止めた。

「魔獣だ！」

一番先頭を走っていた馬車の従者が叫ぶ。いなほとガントの動きは速かった。一人怒りのあまり状況を理解していないキースを無視して馬車を飛び出す。

「おでましたな！」

「ああ……心配はせん。だが獲物は残せよ？」

「そりゃ俺のセリフだったの！」

馬車を飛び出し瞬間に駆けていく。後ろでようやく事態を理解したキースも慌てて馬車から下りた。「俺を無視するなあ！」情けない怒声を背中に、いなほとガントが先頭に躍り出る。

「来たか」

そこではすでにアイリスが抜刀をしていた。敵は十体のゴブリン

の群れ。トロールのように緑色の肌だが、その全長はエリスよりも低い程度か。お粗末な棍棒と簡素な鎧を装備して、先頭に立つアイリスを囲むように布陣している。

ネムネはアイリスの影に隠れるように、へっぴり腰で立っていた。ありや喧嘩慣れしてねえな。といなほが結論する。同時、合流もつかの間、いなほとガントはアイリスの横を抜けてゴブリン達の真つただ中へ躍りかかった。

「うおらあー！」

「ぬうん！」

剛腕と剛剣が一閃の元ゴブリンの命を刈り取る。そして二人は背中合わせに構えた。

完全にゴブリンに囲まれる形になるが問題ない。いなほとガントの二人は、自分達が錨のように食いこむことだけが目的なのだ割り切っている。

「『凍てつく風、凍てつく大地、凍てつく歩み、迫りくる者をことごとく凍り尽くせ！』」

直後、アイリスの青色の魔力が詠唱に吸い込まれ、ゴブリン達の足元を凍らせる形で顕現する。お得意の氷結魔法で、敵の足を止める集団相手に適した魔法だ。

「これでゴブリンは動けない。ネムネ！ この初陣、一匹は狩れ！」

「は、はい！」

アイリスの激励に何度も頷いて、ネムネはガントレットを締め直

すと強化魔法で光る体で駆けだした。充分な速さを伴い、足もとの氷の除去に苦戦する一匹のゴブリンの前に出る。

「伸びて！」

「グギ！？」

髪と同じピンクの光を揺らめかせ、ネムネの右拳が走る。その先に魔力が集中したと思えば、三つ又の刃が拳より現れ、応じようとしたゴブリンの棍棒と拮抗した。詠唱を使わない、魔力を通すだけで単一の魔法が使える魔法具の刃、これがネムネの主兵装だ。

抵抗は一瞬。魔獣とはいえ所詮はゴブリンの膂力で、強化した肉体と、魔法により作られし鋭利な刃には敵わない。哀れ両断された棍棒を抜けて、ネムネの牙はゴブリンの喉元に突き刺さった。

「捻じりながら引き抜いて離脱！」

アイリスの澄んだ声がネムネにその通りの行動を行わせる。傷口を広げるように拳を捻りながら、引き抜く勢いで後ろに下がると、ゴブリンの喉から鮮血が吹き出してそのまま大地に伏した。

「や、やった！」

「よくやったが五十点。敵がいるのにぬか喜びは」

魔獣討伐に喜ぶネムネの背中にアイリスが回り込むと、氷の束縛を抜け、ネムネの背後から襲いかかってきたゴブリンを一刀で両断する。

「このようになる。ダンジョンのような狭い空間と違って、平野は

集団戦ではバツクアタックの危険が常にある。敵が全員いなくなるまで油断するな」

強化の魔法も使わずゴブリンの首をはね飛ばしたアイリスは、驚くネムネの目を見て冷徹に呟いた。かくかくと首振り人形のように動くネムネが了承したと見たか、アイリスはネムネから視線を切ると、氷の束縛を抜けようとするゴブリン達に、改めて氷の束縛を掛け直す。

「で、俺らはいつまでじゃれてりゃいいんだかね」

「知らん。次はキースの実力でも見るつもりなのだろう」

いなほとガントはすっかり観戦モードである。実はこの二人とドルフは、町を出る前にアイリスに一つお願いをされていたのだ。

『彼らの実力を試させてくれ』そう言った提案であった。この時期は、アイリス曰く在籍一年程度の魔法学院の生徒がそれぞれ依頼を受け始める時期らしい。自己紹介のときにアイリスが感じたのは、おそらくあの二人は初依頼を受ける新米だということだ。

なのでよければ彼らの実力をしるついでに、依頼の空気を感じさせたいので、一戦目はサポートに徹してくれと願い出た。だったら俺もまだテメエに実力見せてねえだろと食い下がってきたいなほどが、アイリスは呆れた風に「お前は闘わなくてもわかるくらい強い」とのこと。それにはガントもまた深く頷いたので、渋々いなほは引き下がったのであった。

余談はあったが、そういうことでもし比較的楽な魔獣が出た場合、アイリス曰く初めての依頼だろう二人がどの程度活躍できるか確認することになっていたのだ。

なので二人は突出して数匹殺して後は牽制、アイリスは足元を凍らせるだけの、本人にとっては簡単な魔法を使うに留めていた。

いなほから見た見たネムネは、戦いを見た後でもどうでもいい存在だ。ビビってるのか腰が引いてる。あれでは折角強化して強くなった体の意味がない。一応基本的な体の使い方は出来てはいるが、それゆえに目立つ幼稚な部分。

「ケツが緩いんだ。あの女」

呟いた一言は新たな登場人物の出現によって消された。

「ハッ！ なんだよおっさん達！ 折角アイリスさんがゴブリンを足止めしてるのにばーっと立ってるだけなんてさ！」

キースはそう悪態を叫びながら、全身から魔力を放出する。黄色の魔力は、まるで炎のように揺らめいていた。

「うるせえ！ 遅れてきた奴が吠えてるんじゃない！」

「うるさいのはそっちだよ！ 丁度いい。さっきはうやむやになっただけど、ここでまとめてあんたも吹っ飛ばしてやる！」

そう言うと、キースは手に持った杖を掲げた。魔力増幅炉でもある杖を媒介にして、より膨大な魔力が杖の先端に集まっていく。

「『燃やし尽くせ、紅蓮の腕よ』！」

昂った気持ちを表すかのように、怒りの形相のキースが合流したと同時に、一抱えはあるだろう炎の球体を杖の先端に具現化させた。魔力を元に作られた火球を前に、ゴブリン達の動物としての本能が刺激される。

キィキィと甲高い悲鳴をあげるゴブリンを前に溜飲を下ろしたのか、

下衆な笑みを浮かべたキースが、いなほ達がいるのも構わず、ゴブリンの群れの中に火球を放った。

流石のガントも、H+の能力を持つキースの火球が迫るとなれば慌てるのは道理。攻撃の気配を感じた瞬間には、両手剣を前面に構えて離脱する。いなほもガントに僅かに遅れて、襲いかかる火球から逃れる。ではなく、『飛び込んだ』。

「馬鹿が……！」

低く唸り、いなほは拳を握りこむ。そこにいる誰もがいなほの行動に目を疑った。生身の体で、ゴブリンなら焼きつくせる火力の炎に飛び込む暴拳、アイリスもいなほのランクは知ってはいるが、直撃を受けて無事でいられるとは思えない。

火の軌跡を後ろに伸ばしながら、人魂のように揺れて走る火球。いなほは周りの驚愕の視線を浴びながら、ただ不愉快そうに目を細め、火球に向けて拳を突き出した。

激突の瞬間、アイリスだけはその絶技を見ていた。触れると思った火球といなほの拳だが、いなほの拳が纏う風圧に火球が押し負け、遂にはかき消える異常。傍から見たらいなほの拳が火球を貫いたようにしか見えない暴拳。だが火球はいなほの誇る筋肉ではなく、その余波で容易く葬られたのだ。

「あつ……え？」

誰よりも驚いたのは火球を放ったキースだろう。怒りを伴って撃った火球は、避けられるように速度は押さえたが、威力に関しては手加減をしていなかった。

炎はキースがもつとも得意とする魔法である。それが消される、ということとはキースのプライドがへし折れたのと同義である。易々と蹂躪された己のプライドの末路を見て、キースは自分の目を疑った。

「……だからガキは嫌いなんだ」

唾を吐き捨てながら、いなほはゴブリン達に振り返る。足元は氷で捕らわれ動けず、目の前には不愉快そうに指の骨を鳴らす、炎をかき消した異常の化け物。

「おいテメエら。今の俺は随分ゴキゲンだからよ、来てえなら相手になるぜ？」

戦いになるはずがない。ゴブリン達は持てる力の全てを振り絞り氷の拘束から逃れると、我先にといった感じで森のほうへと逃げていくのだった。

「……つたく」

いなほは髪を掻きあげながら逃げていくゴブリンを見送ると、全員が森に消えていったところでキースに向き直った。

「ひっ……」

冷たい視線に晒されたキースが小さく悲鳴をあげ、腰を抜かして尻をついた。

殺される。そんな予感がキースの体を縛った。震える体、焦点の定まらない視線。たかが一撃魔法を消された程度でと笑うことなかれ。温室育ちのキースには自分の魔法をたかが拳の一薙ぎで消されるのも衝撃だったが、何より敵わないと分かっている人間に襲いかかる魔獣を、たかが一睨みで追い払いたいいなほの視線に晒されているのだ。

その恐怖と言えば筆舌し難い。言うなれば蛇に睨まれた蛙、まな

板の上の鯉。プライドという鎧を剥がされたキースに、野獣に人の皮を被せたような男の殺気に抗う術はないのだ。

「くっただらねえ」

そんなキースの様子を見て、いなほはさらに落胆の色を濃くした。いなほはと言えば、キースに殺意を向けたわけではない。言うなれば幼子を叱る大人の如き僅かな怒りの念を向けた程度のことだが、それだけで悲鳴すらあげるような奴に、いなほはこれ以上構う気力は沸かなくなつたのだ。

最早キース等眼中に入れず、いなほはその横を抜けて馬車へと戻っていく。

「つまらないんだよ、テメエは。まだあのへっぴり女のほうがマシつてもんだ」

責めるでもなく、本当に興味が失せたといった言葉をいなほは残して去っていく。

そしてそれは他の者も一緒だった。唯一ネムネだけが去り際に「大丈夫デス。次頑張るデスよ」と励ましの言葉をよこしてくれたが、醜態をさらしたキースには届かない。

そしてふらふらと元の馬車に戻ると、そこには二人の姿はなかった。問いただそうと従者の人に目を向けると、ただ一言「言いにくいのですが、貴方と一緒にの所にいたくないのだと……」そう申し訳なさそうに言われ、キースは呆然と腰を下ろした。

「クソっ……」

呟く言葉は無力の証。手に持っていた杖をキースは投げ出して、顔を覆い頂垂れるのだった。

第十六話【ヤンキーの価値観は？】（後書き）

次回、ヤンキーと小休憩

第十七話【ヤンキー小休憩】

「でいでいでいでいでDランクなんデスカあああああ!？」

狭い馬車の中にネムネの悲鳴染みた声が鳴り響いた。「あっ、勿論ミライアイスさんのFランクも凄いですよ!」続きの言葉は、たまらず耳を押さえたアイリスといなほには届かない。

キツと目を細めて、騒音が終わると今度はいなほが怒鳴りつける。

「るっせえ! んなことで一タビビってたら寿命すぐなくなんぞ!」

「で、でも、Dランク、しかもC手前の+付きなんて……普通そういう人って貴族の人や王族の人ばかりデス」

ネムネは興奮冷めないといった様子で鼻息を荒くした。

無理もないだろう。いなほは知らないが、D+というランクは、国の上流階級である貴族級の中級以上や王族、そして魔獣を超えた化け物である魔族といった者達が持つランクである。種族として強いとされている鬼人や竜人やエルフとすら互角以上に渡り合うことが出来る。

ただの人間が持つランクとしては規格外の代物なのだ。アイリス程の才気溢れた人間でも、修練の末に届くか否かといったレベルである。だがそのところをイマイチ理解していないいなほは、むしろ最強ランクであるA+でないことに不満を覚えていた。

「ランクなんかで決められるのは糞だがよ。どうせならAランクって奴にいつかはなつてやるつもりだ。だからビビるんじゃねえよへッピリ」

「私の名前はヘッピーではなくてネムネ、デス！ それはともかく、いなほさんなら本当にいつかAランクとか行きそうで怖いデスよね」

「それには私も同感だ」

アイリスが同意し、ガントも首肯する。「だろ？ やっぱそう思うだろ？」いなほは褒められて満足げにふんぞり返った。

最も、こんなのがAランクになったら世も末だがな、内心の気持ちには出さない空気の読めるアイリスであった。

「ホホ、随分仲がよろしくなったようですね」

朗らかに笑いながらルドルフが言った。何故か真ん中を走る豪華な馬車ではなく、こちらの狭い馬車に乗ってきたのだ。曰く「冒険者の皆様がいるここが一番安全ですから」とのこと。

「仲が良いとは……まあこのしょうもない男を除いた私達三人は随分と仲が良くなりましたが」

アイリスが皮肉たつぷりにいなほを指差しつつ言った。「おいおい、おっさんはこっち側だろ？」と冗談交じりにいなほはガントの肩を小突いた。反応はないが、それで充分。

「嫌われ者には肩身が狭いぜ」

「そう言いながら大股開きで座ってるのは何処のどいつだかな」

「んだよアイリス。女が股広げて座るなんざ下品だぜ？」

「君のことだ！」

ひと際大きくいなほが笑うと、釣られるようにネムネとルドルフも笑い声を上げた。見ればガントの口も僅かに綻んでいる。納得いかないのはアイリスだ。全く、この男といると調子がいつも狂わせられる。

「それにしても、キースくん大丈夫デスでしょうか？」

ふと心配そうに後方の馬車に乗っているのであろうキースの方に視線を向けるネムネ。

「知らねえよあんなガキは。それにただの喧嘩だったらまだいいが、あの状況で自己中發揮して仲間もろとも攻撃する奴なんざに、背中預けようとは思わねえしな」

「ガントから聞いた話だと、君の方も彼をあおったのだろうか？ だったらあの最悪な攻撃は、君に原因の一端があると私は思うのだが」

「正論だなアイリス。だけどあのガキ。俺があおらなくても、いずれは誰かとソリがずれて喧嘩してただろうよ。しかも、決定的に最悪な場面でだ」

言われればそうだなとアイリスも肯定した。ランクという明確な強弱の優劣があるが故、よくキースのように自分より下の人間を見下す者をアイリスは随分と見てきた。しかも多感な十代の半ばである少年だ。分かりやすく自分が力を持っているという事実が、彼を増長させたのだろう。

ともすればこれは良い機会だったのかもしれない。自己紹介から態度のままだったならば、いずれキースは何処かで命を落として

いただろう。

自分より下の者を見下し、蔑み、結果として破碎した人間関係は、キースに決定的な終わりを与える。

そこまで考えていなほがキースにあのような態度をとったのだとすれば驚きだが、絶対この男はあの場のノリでああいったことをしたに違いない。

だがそれでもいなほの行動がある意味正しかったので、アイリスは黙ってしまった。

それにあの少年、私的にも気に食わなかったし。だが、である。

「だからと言って滅茶苦茶な態度をとってる君がそんなことを言っても説得力に欠けるが」

「俺はいいんだよ。あのガキと違って『分別』がついてる」

「その言葉がどれほど信用ないかわかってないんだらうね君は……」

頭を抱えるが、この件については本当に今更だらう。現にいなほはキースのように仲間もろとも攻撃しようとはしなかったが、キースはその愚かを行った。

だが性格的にはキースもいなほもどっこいどっこいがいい所だ。むしろ力がある分いなほの方が悪いだらうアイリスは思う。

「まあ彼については気にしなくてもいいだらう。いずれは時間が解決するさ」

我ながら無責任な言葉だなと自嘲しながら、アイリスは不安げなネムネの頭を優しく撫でた。

「ミラアイスさん……」

「他人行儀はくすぐつたいな。アイリスと気兼ねなく呼んでくれ」

「わかりましたデス。アイリスさん」

まだどこかきこちなくではあるが笑い返すネムネ。

「そついやよルドルフ。村のほうにはどの程度で着くんだ？」

「魔獣の襲撃がなければですが、明日の正午には着くはずです。途中野営をいたしますので、皆様には夜の番をしていただく予定です」

いなほの質問にルドルフはそう返した。

「FランクとDランク、そして熟練のHランク冒険者と頼りがいのある学生様がいたので、私どもは安心して眠らせていただきます」

「おう。全部俺に任せとけ」

「君に任せたら逆に不安だよ」

ルドルフの信頼に自信たっぷりに応えるいなほと、諫めるアイリス。

そついえばと切りだしたのはネムネだ。

「いなほさんってどういった魔法を使うんデスか？ Dランクの人が使う魔法って私見たことないので、よければ教えてくださいデス」

「おお。それは私も知りたかったことです」

「……………」

アイリスを除いた三人が興味津津といった風になほを見た。「フツ」と得意げにいなほが笑う。自信ありげな表情にネムネの瞳が輝き、対照的にアイリスは嫌な予感がして額を手で押さえ頂垂れた。

「魔法なんざ産まれてこの方使ったことがねえ！」

堂々とそう告げたいなほに、一同が声を失った。静寂というか沈黙。数秒ほど、馬車が鳴らすリズムカルな音以外に何も聞こえなくなる。

「え。や、いやデスねーいなほさん。冗談デスよね？」

ネムネがわざと明るい口調で言うが、いなほはただ「こんなことで冗談言わねえよ」と大真面目に言うのだから、今度こそネムネはおろか、ルドルフの表情すら凍りつく。

最初に覚醒したのはネムネだった。いなほがDランクだと知った時以上の大声を張り上げる。

「ええええ！？　じゃあDランクってというのは嘘なんデスカデスのデスでしょうか！？」

「なわけねえだろ！　文句があるならそういう風に俺をランクした黒水晶に言いやがれ！」

「……………いやはや、本当だとしたら、これはまさに驚きというか、いやはや本当にいやはや……………」

ひえええと叫ぶネムネの隣で、ルドルフも驚きで流れ出した額の

汗をハンカチで拭った。

そこまで驚かれることなのだろうか。いなほがアイリスを見れば、アイリスは肩を竦めて苦笑してみせた。

「残念だが彼の言うことはおそらく事実だ。私と最初に会ったときなんて強化魔法も使わずに馬よりも速く走っていたしね。それに君達もアズウェルドの炎を何の魔法も使わず消したのは見たはずだ。少なくともランクのことについては、私の二つ名に賭けて偽りではないことを誓おう」

「でもデスでもデス。いなほさんがDランクなのはわかったとしても、魔法が使えないというのは些か信じられないデスよ」

うんうんとルドルフも同じ気持ちなのか頷いた。これについては僅かばかり同じ気持ちを抱いてるといってもいいアイリスには弁解のしようがない。

そもそも何で私が弁解してるんだという気持ちの混ざった視線をアイリスはいなほに送った。だがいなほも、説明のしようがないため、むうと声を詰まらせてしまった。

「……確かこの辺りに魔性の花が咲いていたはずだ」

と、そこでガントが割り込んできた。

魔性の花とは、一年中咲いているタンポポに似た花だ。花卉の色が紫色と毒々しいが、これを軽く煎じて飲むことで、体内にある魔力の栓とでもいうものを開き、魔力を扱えるようになれるのだ。基本的に群生地は大陸の無数の場所にあり、採取も簡単なことから、どの家庭でも五つを過ぎた子どもにこれを煎じて飲ませ、魔法を扱える下地を作るのである。

「でしたらそろそろ日も落ちるでしょうから、少し早いですがこの付近で野営をしましょう。皆様のおかげで予定よりも早く進んでいきますし」

「賛成デス。私とガントさんとキース君でキャンプは作っておきますデスから、アイリスさんといなほさんは魔性の花を取ってきてくださいデス」

ルドルフの提案にネムネが手を上げて賛同する。ガントも異存はないのか黙ったままだ。キースに関しては、冷たいがここにいないので了承を取る必要はないだろう。

「すみませんビツヒマン殿。そして君達もありがとう。連れの私情に巻き込んでしまい申し訳ない」

そう言っただとアイリスは深々と頭を下げた。何処までも律儀な女性だとルドルフは微笑み、ネムネはアイリスに頭を下げられてことに恐縮する。ガントはいつも通りだ。

いい仲間を得られた。アイリスは頭を上げると静かに口を緩め、一転、どうでもよさそうに踏ん反りがえっているいなほを睨んだ。

「君のために皆様が厚意を寄せてくれているというのに！ 君は！ 全く君って奴は！」

「あー？ おう、ありがとうよテメェら」

「この不良！ 最低！」

「んだよ。知ってて俺を誘ったんだろ？」

「それとこれとは話が別だあ！」

今にも泣きそうな悲鳴を上げるアイリスを見ていなほはゲラゲラと爆笑した。

果たしてこんな男のために野営をとるのは正しかったのだろうか。等と一人、ちよつと目が潤んでいるアイリスを見ながらネムネは思うのであった。

第十七話【ヤンキー小休憩】（後書き）

次回、料理とか魔力とか

第十八話【ヤンキーと料理話】

街道の道中、草原の画でいなほ達の野営の準備は始まった。

とはいっても寢床はそのまま馬車を使うのでそこまで準備するものはない。精々馬車に布を敷いて、あらかじめ持ってきていた薪を組んで炎を灯し、そして魔獣の嫌いな匂いを発する香水を馬車を中心に大体百メートルに撒く程度だ。一応ということで、アイリスが普段使っている半日程の効力があるランク無しの魔獣を弾く結界を展開してから、いなほとアイリスの二人は魔性の花を探しに森の中に入っていた。

日も傾きオレンジ色に染まる世界。森の木漏れ日からの斜陽は都会育ちのいなほの目には幻想的だった。

少しばかり歩いたところで、アイリスが立ち止まる。

「見つけたぞ。あれが魔性の花だ」

ほら、とアイリスの指差す先には、紫色をしたタンポポが幾つも木の根つこの傍に咲いていた。魔性の花の名の通り、毒々しい見た目でありながら、艶やかな印象を覚えるのは魔のなす美か。アイリスはその内のひと際大きな物を一つ摘みとった。

「さて戻ろうか。大丈夫だとは思うが、今回の依頼の最高戦力は我々だ。居たほうが依頼主側も安心するだろう」

「わかった……つかよ、それ一つでいいのか？ これかつこむだけでデメエラの使ってる魔力つてのが出るようになるんざ、疑うわけじゃねえが、やっぱどうにも信じられねえからよ」

「私としては、いや、私達としてはこの花のことを疑う君のことこそ信じられないといった感じだな。いずれにせよこれを君が飲めば大なり小なり魔力が覚醒するのはまず間違いない。というか私としては君のその馬鹿げた筋肉のほうが魔法染みてる気がしてならないがな」

と言いながら、隣のいなほのタンクトップから伸びる浅黒い腕を見る。

ゴブリン戦後馬車に乗った際、ガントはいざ知らず、鍛えているとはいえ全体的に細身かつ、鎧も付けていないいなほの乗った部分がぎしりと悲鳴をあげたのを聞いて、試しにいなほの腕を持ってみたアイリスはそのあまりの重さに驚いたものだ。

この世界での体重の単位は違うため実際の体重はわからなかったが、いなほに聞いたところ「二百キロ位あるぜ」とのことだった。それがどの程度の重さかは知らないアイリスだが、どう考えてもいなほの体は見た目以上に重すぎる。

「改めて君の筋肉には驚かざるをえないよ」

拳で軽くいなほの二の腕を小突く。力を入れていないにも関わらず、その肉は鉄のような固さを持っていた。人の限界を超えた筋繊維の密度。これこそいなほの人外の秘密なのかもしれない。

「へへっ。俺は馬鹿でろくでなしで良いとこなんざ殆どねえが、こいつだけは俺の自慢よ」

得意げに鼻を擦り、いなほは見せびらかすように腕に力を込めた。くつきりと浮かび上がる三角筋と上腕二頭筋と三頭筋等々、およそ完璧とあっていい程の美しい曲線を描く筋肉を見て、何故だかアイリスは言いようのない敗北感を覚えた。

「確かに。君のそれは女の私から見ても羨ましい。同性から見たら妬みの対象だろうさ」

隠す必要もないだろう。アイリスは内心の悔しさを隠すでもなく吐露しつつ、掌で魔性の鼻を弄んだ。

日が落ちるのは早い。太陽がその半分以上の姿を隠した頃、二人は野営地へと溶着した。

「アイリスさんこつちデス！」

燃え上がる焚火の傍から二人の姿を確認したネムネが手を振ってくる。焚火を囲うように、ルドルフ、ガント、そして少し離れてやさぐれたキースが座っている。馬車を操っていた従者も別の場所で焚火を囲って、早速食事を始めていた。

勿論こちらの焚火にも簡単な料理が置いてある。保存魔法により鮮度を保ったままの肉は焚火の火にあぶられ、既にこんがり焼けており、美味そうな肉汁を滴らせていた。当然それだけではなく、村で取れた新鮮な野菜はそのまま一口サイズに切られ皿に盛り付けられてある。使い古されてはいるが、よく洗われ磨かれている軽い金属を使ったマグカップには並々と注がれたアルコールで満たされていた。

「何だネムネ。ガキの癖にいける口か？」

「何言ってるんデスカいなほさん。お酒くらい子どもころから飲んでるデスよ」

「へえ……まっ、アメリカじゃそれも有りなのかもな」

いなほとアイリスはガントとネムネの間に座り、カップを受け取った。

「駆けつけ一杯」

「その前に乾杯だ」

早速飲もうとしたいなほの口をアイリスが押さえた。何となくムカついたので口に当てられた指を舌で舐める。「うわひゃ」とアイリスの悲鳴と共に手が離れた。

「乾杯！」

いなほがカップを掲げて叫ぶと同時に口を付ける。炭酸とビール独特の苦みの向こうで存在を主張するフルーツの甘さが舌を楽しませる。突き抜ける炭酸の刺激を口だけではなく喉でも感じながらいなほは一息で飲み干した。勢いよく胃になだれ込んだアルコールの熱が心地よい。

「くああああ……ッ！ あー、やっぱこれよ」

歡喜に震える。芝生の大地にカップを置いて、いなほは次に良く焼けた肉に手を伸ばした。串に刺さった肉は、一ブロック丸ごと使ったかのように分厚い。熱くなった串の熱など気にせず、串ごと肉を持ち上げたいなほに、ネムネは近くに置いたナイフを差し出した。手渡されたナイフを片手に、空いてる皿の側に近づき、その上で肉にナイフを刺しこんだ。僅かな抵抗の後突き刺さったナイフお切り口から零れ出す油と焼けた肉の匂いが目と鼻に多幸福感を引き起こさせる。口に溢れる唾液を呑み込み、落とさないように慎重に、だが早く食べたい一心で肉を切り分けた。

皿に落とされた肉を一枚、二枚、三枚切ったところでいなほは隣のガントに肉とナイフを渡した。

絶妙なレア加減で焼かれた肉の色彩の美しさは、他では見れない野生の紋様だ。いなほの目は隣で肉を切るガントと、舌で舐められたことを怒っているアイリスを見ていない。フォークに似た形状の食器を持ち、ふんだんに持った水も弾けるキャベツっぽい何かを肉の上に置く。

いなほはその二つをもろとも突き刺して、一口で口の中に放り込んだ。肉汁の濃い味を包みこむ歯ごたえある野菜の触感が、そのままではしつこそうな肉の味を抑えながらも引き立てる。

噛むごとに零れ出す肉汁が唇を濡らした。いなほは口を拭くと、満足げに息をつく。

「美味え。何だ、随分いい飯だなオイ」

「私、お肉焼いたの私デス！」

片手にフォークに刺した肉を持ちながらナムネが得意げに言った。ガントとルドルフも満足そうだ。特にルドルフは自身が持ってきた食料に満足してもらえているのが嬉しいのか、いつも以上に笑顔が晴れやかである。

「これでも本業は様々な食糧物品の卸売なので、こうして私の商品を喜んでいただけるのは嬉しいです」

「最高だぜルドルフのおっさん。戻ったら貰った金でテメエの所の飯たかりに行くから覚悟しとけよ！　こんだけ美味え飯出すんだ！　金のある限り食ってやるからな！」

カップを掲げていなほは叫んだ。隣で必死に手を拭いているアイ

リスとの対比は何とも言えないシニールな光景である。

「うう……最悪だ。筋肉馬鹿に汚された……」

「んだよ。食わねえなら貰うぜ」

さめざめと泣くアイリスの前の皿を問答無用で奪おうとするいなほだが、その手が皿に触れようかというところで氷の柱が手と皿の間に壁となって突き立った。

「危ねえじゃねえか」

「知るか！　というか勝手に食べようとするな！」

キツといなほを睨みつけ、アイリスは皿を掴むと作法など気にせず口の中に野菜と肉を流し込んだ。

そして頬をリスのように膨らませながら、マグカップの中身も瞬く間に飲み干す。

「勢いいいな」

「誰かさんのおかげでな」

鋭い眼光なんのその。いなほは低く笑って次の一杯をアイリスのカップに注いだ。

なんやかんやで酌を受け取り一口。まだ一週間程度の付き合いだが、すっかり二人の間に遠慮はなくなっていた。あるいは豪気ないなほの性質が噛みあつたためか。

「あつ、ところで魔性の花摘めましたデスか？」

「ん……」

「じゃあ擦っちゃうのでくださいデス」

アイリスは持っていた魔性の花をネムネに投げ渡した。

「……そんな何に使うのさ」

そこで一步引いていた所に居たキースが声をかけてくる。ネムネは空いている皿の上に魔性の花を置き、いつの間にか作った粗削りの丸い棒を用意すると、キースの方を見た。

「実はいなほさんがまだ魔法はおろか、そもそも魔力すら出すことが出来ないらしいデスので、丁度いいから花を使って魔力を出せるようしようってことデス」

「魔法どころか魔力もって……冗談、だろ？」

「それを今から確かめる。魔力を出したことはないなら、これを飲めば花の魔力で暫く紫色の魔力光になるはずだ」

信じられないといった様子のキースにアイリスがそう続けた。そうこうしている内に、強化の魔法まで使って勢いよく潰り潰しを行ったことで、魔性の花はすっかり紫色のペーストとなっていた。

もう誰から見ても飲んだら死ぬ色をしていた。折角味のオーケストラを楽しんでいた口内が、目の前のヘドロっぽい何かを見たせいで後味も忘れてしまう。

「……おい。やっぱり俺いらね」

「ハハハ、まさか君ほどの男とあろう者が、まさかたかだか搦り潰した花を見ただけで、まさかまさか怖気づいたわけではあるまい」

「っ!? おうおう! 誰がビビってるだつてえ!? 上等じゃねえか! おいへツピリ! それ寄越せ!」

アイリスの安い挑発に乗せられたいなほが、言つが早くネムネの手元から皿を奪つと、素手で一気に流し込んだ。

第十八話【ヤンキーと料理話】（後書き）

次回、ヤンキー魔力に目覚める。その二

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6548y/>

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

2011年11月28日07時26分発行